

---

## 改版：水色少女の物語～blood & claw～

汀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

改版：水色少女の物語〜blood & claw〜

### 【Nコード】

N4901A

### 【作者名】

汀

### 【あらすじ】

オリキヤラ分多め、汀の『イロ者少年少女シリーズ』第一作。現在大幅改稿中です。

## 序章

### 「始まりの基点」

この物語に登場する主人公は多い。

そのため、それぞれの主人公達全ての、人生と生き様を語るのは容易でない。

そしてそれ故、この物語の始まりを定義するは難しい。

……ただ、この物語のすべての主人公が、ある少女に関わっていた。その少女を主人公にするならば、本来、彼女の生い立ちから語るべきなのだろう。

だがそれでは、この物語に悠長な印象を抱かせかねない。

……よって高校生探偵工藤新一が、二年生の終わりに、「黒の組織」を壊滅させて、1年と少しが経った4月のある夜。

この群像劇の基点を、少女と、白い怪盗の出会いとする。が、

まず、忘れずにいてほしい。

どんな者でも、失望すれば奇跡は消えるという事と、

どんなに失望していようと、意志はその望む方向へと伸びるという事を。

次に、覚えておいてほしい。

意志の力は魔力になるということと、

一人の主人公がすべてを知る訳ではないという事を。

最後に、見ていてほしい。

基点となる少女と、それに関わる周囲。

彼ら主人公達の、意志と、行動。その結果を。

再び繰り返すが、工藤新一が高2の終わりに、「黒の組織」を  
壊滅させて、一年と少し。

少女と、白い怪盗の出会いを、この群像劇の基点とする。

## 序章

### 〈始まりの基点〉（後書き）

〈作者より〉

CNRで連載した私の小説、投稿後になって誤植や辻褄が合わない所をかなり発見してしまい、今回の移転を機に、連載で一部を改めさせていただきました。

（ひどい場合はセリフが丸々変わっている、大変情けないミスなのですが……）

おそらく改版投稿後、旧版の削除をお願いすることになると思います。

今後ともよろしく願います。

「最初の回想／／3月 新一と蘭・基点の2週間前」

例えば。

ある高校生探偵が、大きな犯罪組織を倒したとする。

高校卒業してすぐに、その探偵がNYで幼馴染と結婚式を挙げたとしても、それに無関心な者はいるだろう。

そんなことに構わず、日常の暮らしを続けるものがある以上、仕方ないのかもしれない。

そう。どんな者であろうと、日常はある。

探偵には探偵の日常があるし、暗殺者には暗殺者の日常がある。

他人から見れば特別の機会でも、もしかしたらそれが日常かもしれない。

ただ、その特別な機会である、結婚式の帰り道。

新郎の母親が行方不明になれば、とんでもない事件になるのが筋というものだ。

アメリカ・ニューヨーク近郊・現地時間午後10時

「おばさん、大丈夫かな……」

蘭が、助手席で心配そうに呟いた。

ここは、それなりの広さの道路……の、隅。

5分ほど前、俺と蘭はホテルから慌てて駆けつけ、……ここに車を止め、待機中。

この車から少し離れた前方にあるのは、お馴染の母さんの愛車。ただ、後部座席が軽くひしゃげた状態だ。そしてその周りには、警官が数人行き来し、パトカーも止まっている。

「母さんがそう簡単に死ぬと思うか？」

服部たちが来たとき、かなり喜んで記念のペア写真撮ろうとしたミハーなのには？

母さんはそう簡単には死なないな……」

俺は、蘭に静かにそう告げる。

ついさっきまで幸せな人生の記念日を過ごしていた、新一と蘭。二人は同時に、数時間前のことを回想し始めた。

~~~~~

「蘭ちゃん、オメデトー！」

「あ、ありがとう。和葉ちゃん！」

ドアを開いて入って来た正装の和葉に、ウエディングドレス姿の蘭は笑顔で答えた。

ここはニューヨーク近郊の結婚式場の、新婦の控え室。ちなみに開式20分前。

さらに言えば、蘭の知り合いのほとんどは席について待機中だ。

「ごめんなあ。

平次が道間違えて……。ホンマなら1時間前に来てたはずなんやけど……」

「大丈夫だよ。まだ始まってないから」

蘭は微笑み、また同時にほんの少し安堵した。

招待状に参加の返答をよこした大阪の2人組の未到着を、少し心配していたのだ。

何せここは外国。アメリカなのだから。

一方、同刻。新郎控え室。

「クシュッ……」

「おい、大丈夫か？」

くしゃみをした平次に、タキシード姿の新一が声を掛ける。

「大丈夫や。……誰かがウワサして……クシュッ」

「……本当に大丈夫か？」

「アア」

……この時、実際に和葉は平次の事を愚痴っていたのだが。別の場所にいる本人にそんなことが分かる筈がなく。



「じゃ、また後でな」

「オウ」

平次は会釈し、控え室の外に出た。

そしてまた、和葉も新婦の控え室をあわただしく退場する。

「蘭ちゃん、また後で……」

「あ、うん」

それから15分後、結婚式が始まるのだが……

それが華やかで、とても素敵なものだったことだけは記しておこう。

蘭も、新一も、幸せで……

招かれた者は皆、2人を祝福した。

優作、有希子は当然だが、

小五郎も、英理も……

~~~~~

……なのに、

……なぜ、こんな事件が起こってしまったのだろうか？

結婚式の帰り道。

新郎の母親が、道端に明らかに事故った形跡がある愛車を残し、失踪……

大騒ぎになるのは、明らかなのに。

「……全く、何が……」

俺は顎に手を当て、考える。と、その時。

コンコン……

「Mr・クドー？ オープン・プリーズ」

いつの間にか、警官がこちらまでやって来て、運転席側の窓をノックしていた。

「ア……ハイ」

俺はあわてて日本語で答え、窓を下ろす。

警官は頷き、英語で言った。

「Mr・クドー。このカードに見覚えは無いか？」

と言い、警官が見せたのは、トランプ大の白いカードだった。四隅に金属で補強がしてあるそのカードには、日本語の、流れるような字体で文字が記されている。

『花は舞い、歌は流れ、そして人ならざる者は飛ぶ。』

彼らはいずれ、天と地に響く、お互いの答えを出すだろう。

だが、今彼らが望むのは、ただ共に歌うこと。

First / B e a r d e c l a w

」

「ベアーデ、クロウ？」

読み終えて呟き、俺は警官に英語で尋ねた。

「こんなカード、見たことないです。どうしたんですか？」

そもそも、最後の単語が英単語として成立していない。

B e a r は動物の『クマ』、c l a w は『ツメ』の意味であること  
とを考えると、

……『クマのツメ』という意味だろうか？

「いや……」。

このカード、あの車のすぐそばの地面に、落ちていたんだ。  
裏も見るか？ 念のため」

「ええ」

頷く俺を見、警官はカードをひっくり返す。

「……！」

そこに、文字はなかった。

ただ……

「円の中の五芒星の上に、3本の斜線？」

何だ、このマーク……」

俺は、呆然と呟いた。

……例えば。

ある青年が、あることに必要で、女性を誘拐したとする。

……彼の行為に呆れたものがいても、おかしくはないだろう。  
犯罪である以上、仕方ない。

……だが、彼のこの事件をきっかけに……  
ある、できそこないの暗殺者が、自らの生き様と存在意義に疑問を持ったことは事実だ。

女性を誘拐したのは、本名不詳の男と、23歳の青年。  
そしてそのできそこないの暗殺者は、その青年の妹。

彼らに警察の手は及ばなかった。

この時点で、警察は彼らにたどりつく事すら出来なかったのだ。

新一と蘭の新婚旅行が取りやめになる理由となったこの事件は、  
大騒ぎになるも解決はかなり先だ。

……2週間後。

Beard claw……クマのツメの名を冠した部隊から、  
ある少女が脱走し、白い怪盗と出会う。

この事件は、そこから始まる群像劇の前の、ほん的一幕に過ぎ

ない。

「最初の回想／／3月 新一と蘭・基点の2週間前」（後書き）

く作者よりく

一番最後のシーン、誘拐犯の記述に一部手を加えました。

他には、セリフを少し変更しています。

突然、数字が半角になったり、表記がずれていたりしていたので。

## 第1章 4月 〓 出会いと桜 第1節〓

俺はこの日、とんでもない少女に出会った。

おそらくこの日から、俺はややこしい出来事に巻き込まれることになったのだ。

……と、後になって考えてみる。

まあ、巻き込まれたと言っても別に、その少女に怒ってはいないわけで。

(by 黒羽快斗 後日談)

4月1日午後11時

都内のある場所を、ひとりの少女が懸命に走っていた。

少女の年齢は12歳ほど。

やや長い黒髪がかなり乱れ、身に着けているジーンズや黒いTシャツ、その上に着ている紺色の上着までもが汗でじっとりと濡れている。

「殺されるもんか、このヤロ……」

息切れしつつ、少女はやや物騒な悪態をついた。

同刻。そこから近い場所。

「フウ……これもちがうのか」

線路脇にある草ボウボウの所で、青年が宝石を見つめ、座っていた。

青年が身に着けているのは白いマント。足元には同じ色のシルクハットが置かれている。

彼の名は怪盗キッド。……本名、黒羽快斗。

つい先日高校を卒業したばかりの、駆け出しもイイトコの手品師だ。

「ハ、……、ツツ……」

全速力で走っていた少女は、突然、速度を落とした。

自分の前方、やや遠いところに線路があり、その周りは草がボウボウに生えている。

……チャンス！

少女は草の中を走り（……不思議と足音はしない）、フェンスに手を掛け……

サクッ

その勢いからは信じられないほどの小さな音で着地し、また走り出す……

……その時だった。

ドガッ！



少女は、すぐそばにいた誰かと激突したのだ。

そしてまた、同じ時。

サクッ

「……！」

快斗は草を踏む音に、あわてて振り向き、立ち上がりかけた。

……次の瞬間、

ドガッ！

快斗は、かなりの勢いで走っていた誰かと、激突し……

「わっ……」

のけぞり、草の上にしりもちをつく。

「イタタタタ……」

足を打った激痛に、少女は一瞬顔をひそめた。  
が、

「……………！」

ぶつかった相手を見、彼女は息を飲む。

そして……

「たっ、助けてください！」

自分が、どんな声を出しているのかに驚きつつ。  
少女はその人物に抱きつき、さらに言った。

「私、命を狙われてるんです……………」

「えっ……………？」

「ちよっ……………大丈夫？」

……………一方、快斗はどう反応したのかと言つと。

「……………！」

座りこみかけた少女は、快斗の姿を見、息を飲み……………

「たっ、助けてください！」

切羽つまった、少女の声。

その少女は抱きつき、さらに言った。

「私、命を狙われてるんです……………」

「えっ……？」

「ちよっ……大丈夫？」

訳が分からなくなつて、少しの間、かなりうろたえた。  
まあ……当然の反応だろう。

こうして。

群像劇の基点が打たれた。

怪盗。魔女。吸血鬼。刑事。暗殺者。そして……パンドラ。  
他にもたくさんの方と人を巻き込む、この物語。

快斗はこの少女に出会ってから、巻き込まれることとなる。

そして……

この出会いは、少女にとって、とても幸運な事だったのも記しておこう。

……まあ、この出会いを警察に見つからなかった事も、ある意味では幸運なのかもしれないが。

この日、とても自分は運が良かったのだと感じた。  
でも、あるいはこの事が運命だったのかもしれないと、公園の桜を見、感じている。

そして、キッドさんを大変なことに巻き込む羽目になったのだ。  
だから、キッドさんがそれでも構わないと言ってくれた事、今で

もありがたいと思っている。

(b yある少女 後日談)

## 第1章 4月 〽出会いと桜 第1節〽（後書き）

〽作者より〽

誤解されかねない表現をいくつか改めさせていただきました。（  
旧版当時は知識もなく、他意はなかったのですが……）

それと、擬音語を別の表現に変えた箇所が数箇所あります。当時はそうではなかったのですが、現在はあまり使用していないので。

## 第1章 4月 ㄱ 出会いと桜 第2節 ㄱ

風と共に、消える気配。

一体あの子は、どこに行ったのだろう。

死んでいないのは間違いない。息づかいは聞こえる。

ただ、感じる、白い感触。

その純白が、邪魔をした。

何かに守られている者の、強い加護。  
手を出すなど言っている。

…… 追跡が、出来なくなった。

(by破壊の魔女 後日談)

4月2日 午前1時

「追跡」が、出来ない？」

キッドが少女と出会った場所の近くの、ビルの屋上。

携帯電話で通話中の女は、怪訝そうに通話相手に聞き返した。  
その電話から聞こえてくるのは、落ち着いた少女の声。

「ええ。

何か……守られているようです。

追跡魔術が、シャットダウンされています。

つい1時間前まで、貴女がいる辺りにいたのは間違いないですが、カイン君の術でも、守護霊なんか……こんなには邪魔されないと思います。

……私の杖、“ザイン”“ケーニヒン”は、強いけど、でも、……精神的な防御に弱いです。

白い何か、あの子への追跡術を邪魔しています』

それを聞き、女は嘆息して言った。

「カイン……ああ、あの、現在帰郷中のドラキュラ君ね。仕方ないわ。

キヤス力ちゃん。“追跡”は断念して。

……でも、対象が生きているのは間違いないの？」

『それは間違いなく。あの子……アイリスは、生きています』

と、しばらくして少女は言った。

『首領が、今すぐアジトに戻れ、……って命令を出しました。ベルモットさんに、お伝えします』

「分かったわ、30分後に戻るから」

『分かりました』

女は、携帯の通話を切る。

そして、女……ベルモットは呟いた。

「白い何かの妨害……まさかね」

ベルモットは、眼下、パトカーだらけの道路を見た。  
つい先ほどまで怪盗キッドが近くにいたとかで、搜索の途中らしい。

そして……

自分が追っている少女は、この辺りで行方が不明。

「まさか……ね」

黒の組織が壊滅して、1年と少し。

3日前。

突然拘置所に忍び込んで来た『黒の組織』時代の仲間に、ほとんど誘拐同然に連れ出され……

行くところが無く、その仲間が作り上げた犯罪組織に入ってしまったっている。

……それが、今のベルモット。

不本意な脱獄犯扱いの女は、しばらくの間そこに立って、眼下の線路を見つめていた。

同刻 別の場所 キッドの場合

「犯罪組織のメンバー！？ き、キミが？」

「ええ……」



俺が寺井ちゃんに至急連絡を取り、あわてて入った隠れ家。

……はつきり言っで、信じ難かった。

見た目は12歳ほどの少女。それなのに……  
その少女が、慌てた様に付け足した。

「あの、本当にありがとうございます。助けて頂いて……。  
脱走したんです。私……」

「脱走……。貴女の御名前は？」

と、寺井ちゃん。

……そーいや、俺はそれを聞いていなかった。

「本名は、桜さくらと言います。

コードネームは……アイリス。

戸籍は……無いです」

「戸籍が無い？ ……どういった組織なの？」

「あの、信じて、いただけますか？」

桜ちゃんは、言いにくそうに顔を上げた。

「『黒の組織』ってありましたよね？

1年ちよつと前に壊滅して、かなり大騒ぎになった大規模国際マ  
フィア」

「……うん。当然」

……知ってるどころか、人の父親を殺した組織だぞ、それは。  
まあ、壊滅してもパンドラについての手がかりがほとんど得られず、今も俺は怪盗をやっている訳で。

腰を浮かしかけた寺井ちゃんを目で制し、俺は訊いた。

「その組織がどうかしたの？」

「……誰にも言わないって……」

「約束する。絶対」

俺の言葉を聞き、桜ちゃんは言った。

「その組織の残党が……」

顔さえ警察にばれずに、生き残った幹部が一人だけいたんですけど……

そいつが、『黒の組織』の元メンバーを集めて、犯罪組織を作ったんです。

私は、『黒の組織』の壊滅のあと、その……犯罪組織の、構成員になったんです」

「な、……何だって？」「なんですと？」

俺と寺井ちゃんは、同時に腰を上げた。

俺の父親、黒羽盗一は昔、『黒の組織』の奴らに殺された。けどそういう事情がなくても、桜ちゃんの話を見捨てることはなかっただろう。

桜ちゃんは、ポケットに38口径のリボルバーを入れていたから。

脱走の際、銃口を向けた追っ手のモノを、桜ちゃんは逆にひったくったという。

もちろん、そのリボルバーは本物。話を聞かなくても、桜ちゃんが何かの犯罪組織にいたのは間違いなかった。

俺と寺井ちゃんはこの夜、桜ちゃんの話と、……彼女の提案を、聞いた。

それが、『水色少女』の始まり。

そして。

桜ちゃんが、桜ちゃんでなくなるのは、このすぐ後だった。

(by 黒羽快斗 後日談)

## 第1章 4月 〽出会いと桜 第2節 〽（後書き）

〽作者より〽

一部のセリフと、桜が持っていたリボルバーの設定を一部変更しました。

ちなみに、ひったくられたリボルバーの持ち主の話は、後で出てくる予定です。

## 第1章 4月 出会いと桜 第3節

おそらく、私の戦いはこれからなのだ。

相手は、凶悪さに関しては『黒の組織』と負けない。

何より、その事は元構成員の私が知っている。

規模の上ではさすがに負けるけど、……それでも十分、危険があるのだ。

だから、キッドさんには警告した。

『貴方、周りの人が狙われたとしても……

平気でいられますか？』

すると、キッドさんは言った。

『大丈夫だろ。』

それに、『黒の組織』にはこちらも、宝石を巡る因縁が決着ついてないんだ』

一体どんな因縁なのかは教えてくれなかったし、知ろうとも思わない。

それが一番いいと、私は思ったから。

そして、話してみても分かった。

キッドさんは優しい。

だからこそ、私の提案に乗ってくれたのだろう。

(by 桜)

4月3日 午後9時50分 キッドの場合

「坊ちゃん。あの方は、桜さんは……」

心配そうに呟く寺井ちゃんを見、俺は言った。

「大丈夫だろ。」

あの子が強いのは確認済みだし、  
それ以前に、命を狙われているからな。  
保護する人が必要だったんだ」

「ですが……」

「寺井ちゃん。これは試験を兼ねた賭け、だろ。  
あの子が、桜……いや、ユーリアとしてやっていくのか。  
やる気があるのか。それを見るための。  
警察と一晩追いかけてこして勝てる奴なんて、そうはいないだろ。  
もし……捕まったとしても、あの子の年じゃ逮捕されない」

白いマントにシルクハット姿のキッドは、懐の中の無線を取り出した。

「もしもし、桜ちゃん、聞こえる？ こちらキッド」

『あ、はい……。こちら桜。聞こえます。  
……どうぞ』

「確認するよ？」

今日、警察に予告状を送りつけた。『怪盗キッド&怪盗見習いユーリア』の名前でね。

君は、『怪盗見習いユーリア』として、一晚、警察と追いかけてこする。

君が顔を見られずに、警察から逃げおおせたなら、君を本当に…怪盗見習いと認めよう。

たとえ捕まらなかったとしても、素顔を見られた者が怪盗をする資格は無いんだからね。

ちなみにこの試験は10時からだから、後5分で無線を切るね。

OK？」

『ええ……分かってます』

「ちなみに桜ちゃん、今どこにいるの？」

『杯戸公園のフェンスの所です。』

路地を挟んでビルが建っているんですけど……あまり目立たない所だから』

「分かった。」

じゃあ、あと5分で試験開始。

1分前になったら、また無線入れるね？」

『分かりました』

その声を聞き、キッドは無線の電源を落とし……代わりに耳にイヤホンをつけた。

イヤホンから聞こえてくる静寂。キッドも黙り込み、ふと考え込んだ。

キッドに助けを求めた少女、桜の提案は『自分が怪盗キッドの見習いになる事』。

というのも、

『キッドさんの、怪盗としての技術を学びたい。きっと相手を倒すのに役立つと思うから』

……らしい。

出会ったきっかけを考えると可能性は低いが……

それでも。

桜自身が、『黒の組織』壊滅後のその犯罪組織とやりに密通している可能性がある。

まあ、あらゆることを考慮した結果、この『試験』があるのだが。

『えっ………？』

考え込んでいたキッドは、耳につけていたイヤホン……

もとい、桜ことユーリアのシルクハットにつけていた盗聴器からの、本人の声で、その思考から脱却した。

「……何かに……呟いた、のか？」

キッドが思わず呟き、盗聴器の感度を上げた、その時だった。



ドサッ。

盗聴器が拾った、何かが落ちてくる音と、数拍おいて……

『う、うわあああ！』

桜の悲鳴……！

「おい、何かあったのか？ オイ！」

寺井は、急に無線機を取り出して怒鳴りだしたキッドに驚き、何があったのか訊こうと口を開いた。

「坊ちやま、何が……」

「寺井ちゃん！ ちょっと行ってくる。そこにいて！」

……あ然とする寺井。

あわてて止めるが、すでに遅く。

キッドは、全速力でそこを駆け出した。

第1章 4月 〽出会いと桜 第3節 〽(後書き)

〽作者より〽

無線でのキッドのセリフに、一部追加した部分があります。  
他には、ト書きの表記を少し変更しました。

## 第1章 4月 ㄱ 出会いと桜 第4節

走りながら、考える。

一体、桜ちゃんに何があったのか。

少なくとも……無線から聞こえた叫び声は、尋常じゃなかった。

(by 黒羽快斗)

4月3日 午後9時50分 桜ことユーリアの場合

杯戸公園のフェンスの真下。コンクリートの上。

そこに座っている水色のマントとシルクハット姿の桜は、努めて冷静になろうとしていた。

高揚する気持ちと、不安。

そして……これまでの出来事。

桜は、キッドの見習いとしての通り名を『ユーリア』と希望した。

それは……かつて桜と家族同然の仲間だった、既に亡き人の通り名。

貴女の通り名、使っても構いませんよね……千恵さん。

黒の組織壊滅後に死んでしまった少女の名を、桜は声に出さずに  
呟き……顔を上げる。

公園に植えられた自分と名前と同じ、桜の木。  
花びらが、変装用のメガネをかけた自分の顔にも、舞い降りる。

『もしもし、桜ちゃん、聞こえる？　こちらキッド』

無線からの突然の声に、桜は慌てて応答した。

「あ、はい……。こちら桜。

聞こえてます。

……どうぞ」

『確認するよ？』

今日、警察に予告状を送りつけた。『怪盗キッド&怪盗見習いユーリア』の名前でね。

君は、『怪盗見習いユーリア』として……

一晩、警察と追いかっこする。

君が顔を見られずに、警察から逃げおおせたなら、君を本当に……怪盗見習いと認めよう。

たとえ捕まらなかったとしても、素顔を見られた者が怪盗をする資格は無いんだからね。

ちなみにこの試験は10時からだから、後5分で無線を切るね。

OK?』

「ええ……分かってます」

『ちなみに桜ちゃん、今どこにいるの?』

「杯戸公園のフェンスの所です。  
路地を挟んでビルが建っているんですけど……あまり目立たない  
所だから」

『分かった。』

じゃあ、あと5分で試験開始。

1分前になったら、また無線入れるね?』

「分かりました」

向こうが電源を切ったのだろう、ブツリという音がして、桜は軽く息を吐く。

まったく……よく考えたね。キッドさんも。

桜が『怪盗見習いユーリア』として認められるための試験は、

『警察と一晩追いかけてこやって、捕まらないこと』

おそらくキッドは、桜が警察に捕まると予測しているのだろう。

桜自身、100%上手くいくとは思っていなかった。

……結局、上手くいくかは運しだいなのだ。

そして、しばらく経った時。

ドンッ……

銃声のような音が脈絡無く上方から聞こえたのは、気のせいだったのかもしれない。

それほど、微かな音だった。

……それこそ、耳のいい桜がかろうじて聞き取れたほどの。

「えっ……」

桜は思わず眩き、その方向……つまり、目の前のビルの屋上に視線を上げた。

何かが落ち、目の前を一瞬だけ遮る。

ドサッ

自分の頬に暖かい何かが飛び……

路地に落ちたそれを見て、

「う、うわあああ!」

桜は悲鳴を上げ、  
気を失った。

検問をすり抜けるため、警官に変装したキッドがそこに到着したのは、それから3分後。

「……！」

思わず息を飲む光景。

だがそれでも、何があつたのかすぐに理解できた。

「ビルの上からこの死体が落ちてきて、……悲鳴を上げて失神したのか？」

思わず呟く。

路地の上には、若い男の……血まみれの死体。

横のビルの上から落ちたのだろっ、手すりの残骸らしきものがすぐそばに落ちている。

そして、そのすぐそばで座ったまま気を失っている……

桜こと、水色のマントにシルクハット姿のユーリア。

その頬には、男の血が飛んでいる。

そしてその上に、サッ……と吹いた桜の花びらが全てを覆つ、凄惨な光景。

「……」

キッドは無言で考え込み……

やがて、無線を取り出した。

警官の一人の無線連絡により、中森警部がそこに来たのはさらに4分後。

快斗同様、その場の光景に皆は一瞬、息を飲んだという。

……失神していた怪盗見習いユーリアと思われる少女は、警察病院へ搬送。

男性の転落死体には足に銃創あり、事件は捜査一課に引継ぎ。

警察の記録には、そう記されている。



## 第1章 4月 ㄱ出会いと桜 第4節ㄱ(後書き)

ㄱ作者よりㄱ

話の内容が対になっているので、前話と同時投稿とさせていただきます。

CNRでの旧版を読んでくださった方はご存知だと思いますが、転落死した男性の話は、後の節で出てきます。

10月29日追記：以前書き忘れていたメガネの存在について、書き足しました。

## 第1章 4月　く出会いと桜 第5節く

病室のドアをゆっくりと開き、中に入る。

個室のベッドに、水色のワイシャツを着た少女が座っていた。

少女はこちらを見ると、わずかに会釈。

成程。真面目そうな眼鏡の少女。何の変哲もない。

この子が、怪盗キッドの『見習い』なのか？

思わずそんな事を考えていると、

「警察の人？」

と、少女の声。

反射的に頷き、逆に訊ねた。

「……君が、見習いの“ユーリア”か？」

(by 中森銀三)

4月4日 午前1時 桜こと怪盗見習いユーリアの場合

目が覚めたら、警察病院のベッドの上だった。

色々と医者に質問受たりしてしばらく経った後、背広を着た中年の男が病室に入ってきた。

「……君が、見習いの『ユーリア』か？」

この人、新聞で見たことがある。

確か、ナント力森とか言う名前のキッド専門の警部さんだ。  
私は頷き、そして言った。

「……ええ、そうです。

……貴方は？」

「私は中森という。

……今から、君にいくつか質問をしてもいいかね？」

「こんな時間に、ですか。

……別に構いませんが」

と、中森警部は真剣な顔でこちらに歩み寄り、私に尋ねた。

「君、年齢は？」

「12歳です」

「本名は何ていうんだ？」

「本名は……ありません」

「……ない？」

言葉をはしよった事に気付き、私は付け足した。

「戸籍が無いんです。生まれた時からずっと」

「……君はキッドの娘か？」

「いいえ」

「君を何と呼べばいい？ ユーリアの名は偽名だろ？」

予想外の質問。

少し考え込み、私は言った。

「……そうですねえ。」

ユーリアの名前は昔の知り合いのを勝手に名乗ってるだけですし

……」

中森警部の肩がコケた。

「……私何か変なことを言いました？」

「……君は一体、どんな所で暮らしていたんだ？」

「……今は、ちょっと……。」

あんな事があつたから。

……色々整理したいんです、頭の中。

死体が落ちてきましたよね、男の人の……転落死体が、私のすぐ前に」

私のこの返事に中森警部は黙って頷き……私はうつむいた。

「顔を見て、びっくりして気を失っちゃって……私」

もし目の前に落ちたあの人が生きているのなら、中森警部は『死体』が落ちてきた事を否定する筈だ。

元から、生きている筈などない。  
私の頬にも血が飛んで……あれほど出血していて、生きている筈などない。

そう考えた時。

「あ、何でだろ。イヤだ……」

私の目からは涙が流れ出していた。

「ちょ、ちよつと……」

中森警部がオロオロする横で。

私は堰を切ったように激しく泣き始め……不思議と、泣き止む気はしなかった。

同刻 工藤邸

R R R R……

工藤有希子行方不明事件が解決できないまま、優作を現地に残して帰国したばかりの新一・蘭夫婦は、就寝後すぐに電話に叩き起こされた。

「誰だこんな時間に……」。

……もしもし、こちら工藤……」

『もしもし。』

こちら、チーム・ベアーデ・クロウと申しまゝーす。

工藤有希子さんを助けたいですかあ？』

電話の向こうから聞こえる、舌つ足らずのガキのような口調と声色。

眠気が、一瞬で吹き飛んだ。

「チーム……ベアーデ？ 一体……」

静かに電話機の録音ボタンを押しつつ、新一は口調を強める。  
自分の母が行方不明であることが周知の事実だったならば、これは単なるイタズラだと判断しただろう。

がしかし、日本のマスコミにこのことはまだ公表していない。  
大体、有希子の車の下にあったカードの存在自体、新一と蘭、優作と現地の警察のみしか知らないのだ。

『工藤有希子の息子にジョーホーだよお。』

今からちよつと前、工藤有希子を誘拐した男が死んだ。ハイドコーエンのすぐそばでねえ。

メグレっていう警部が担当になってるからね。その男のポケット探りな。

アンタの母親の車の下にあったカードの、訳詞を書いたのが入っているからね』

「何だと？」

受話器を握る手に、思わず力が入る。

『花は舞い、歌は流れ、そして人ならざる者は飛ぶ。』

彼らはいずれ、天と地に響く、お互いの答えを出すだろう。  
だが、今彼らが望むのは、ただ共に歌うこと』

……そーいう文だったっけね。……それじゃ』

ガシャン！

向こうが電話を切り……新一は顔をしかめ、受話器を置いた。  
しばらくそのまま考え込み……

「……チクシヨウ……」

小さくそう呟き、受話器を取った。

知り合いの、捜査一課の警部に事実を確認するために……

場所は、警察病院に戻る。

「私は……名前をここで決めます。」

おまわりさん達が私を『ユーリア』って呼ぶには問題があるでしょう？」

「確かに……」

泣き止んだ怪盗見習いの問いに、中森は少しだけ頷いた。

桜は、考える。

ユーリアと、桜と、両立できて……名前負けしない名。  
どんな名にするのか。

ユーリア……

ユーリ……

ユーキ……

「ユーキ……か。ちょうどいい名がある」

「えっ？」

聞き返した中森。桜は顔を上げた。

「ユーキ。

優しいに、樹木の樹……。優樹」

「優樹？」

「ええ。

今決めた、<sup>かりそ</sup>仮初めの名前です。  
自分自身で名をつけるのって変ですかね？」

「確かに一般的ではないが……」

中森は立ち上がる。

「仕方ないな。

本当に戸籍が無いのなら。  
でも……飽きたとか、そういう理由で変えるなよ？」



「……そんなこと、しませんよ」

「それじゃ……」

中森は、病室のドアを開ける。  
そして……この場を去った。

運命がもし交差するのなら。

新一と、もはや優樹となった桜の運命が交差するのはもう  
少し先だ。

少なくとも。

優樹の背中、右の肩甲骨の下にある小さな刺青<sup>いれずみ</sup>。  
その目の前で転落死した青年、奏のポケットの中にあつたカー  
ドの、裏面のマーク。

有希子の車の下にあつたカードの裏面のマーク。

それら3つが全て同じ……『丸の中の五芒星に三本の斜線』で  
あることに、警察が気づくまで。

そう時間は無い。

## 第1章 4月 〓 出会いと桜 第5節 〓 (後書き)

〓 作者より 〓

書き忘れていたことなのですが、桜は、物語の途中から、眼鏡をかけています。

キッドに初めて出会った時は、眼鏡はかけていないのですが、怪盗見習いになるための試験の時、変装目的で眼鏡をかけ始めたという設定です。

改版で書き足すつもりが、はしょってしまったので、読者の方は混乱されたのではないでしょうか(汗  
本当に申し訳ありませんでした。

## 第1章 4月 出会いと桜 最終節

「『花は舞い、歌は流れ、そして人ならざる者は飛ぶ。』

/ Flower petals flutter . Song  
float around . And non-human beings fly .

彼らはいずれ、天と地に響く、お互いの答えを出すだろう。

/ They will soon find each  
other's answer which shakes the  
heavens and the earth .

だが、今、彼らが望むのは、ただ共に歌う事。

/ But now , they only hope to  
sing together . . . .

Second / / Bearde claw

」

以上の文を書いたカードが、転落死した男性が着用していた長ズボンの、ポケットの中から発見された。

今年3月にアメリカで工藤有希子氏が行方不明になった際、氏の車の下に酷似したカードが落ちていたという工藤新一氏の証言。

また、男性転落死の数時間後に工藤邸にかかってきた電話等の状況から考えて、

『チーム・ベアーデ・クロウ』という集団が背後にいると考えていいだろう。

なお、『アメリカとの合同捜査も視野に入れるべきでは』と、工藤新一氏は提言している」

（警視庁 捜査一課捜査資料より一部抜粋）

4月4日午前1時30分

人が来る事のできぬ、ドラキュラの隠れ里。

オモテ社会へ通じる道の上、紫色の花が散る木の下で。

4人の少年少女たちが、立って談笑していた。

金髪の少年と、銀髪の少女と、茶髪の少年と、赤毛の娘。

全員が似たような黒い服を着ており、皆、髪は背中まで伸びている。

そして、全員が紫色の瞳をしていた。

赤毛の娘の背は高く、180cmほど。

ほかの3人の背も、170cmほどだ。

「……で、僕はその脱走した女の子に、

さなだりようじ

『いざとなったら少年課の若い刑事、真田亮史を頼るのをオススメします。』

僕と同じ出身地で、シエルの兄です。僕の家出話も知ってますから』

って言ったんだ」

唯一大きな黒い翼を持つ茶髪の少年の話に、金髪の少年が目を見開いた。

「カイン、ちょっとそれマズイって。

俺が中1の時点で、俺の兄が警察学校卒業してるの、捜査一課の人は知ってるから。

中3になった今、交番勤務終えてどっかに配属されてるはずだ  
て……すぐ気付くだろ。

フツーは」

気まずい沈黙。……やがて赤毛の娘が言った。

「でも……その女の子がホントに頼るのかどーかは、分かんないわ  
よ？」

頼るにしたって、『シエルの兄』じゃなくて、『カインの知り合  
いだ』って言うかも知れないし」

「命刻姉様。それもダメでは？  
だってシエルさんは

『カインというドラキュラの少年が、犯罪組織に入った事』を、  
仲良くなつた刑事さんに話した……』  
って、以前言つてませんでした？」

銀髪の少女の発言に、しばしの沈黙。  
皆、一瞬思考し。

そして。

「マズイ、早く連絡しなきゃ！  
シオンはドラキュラのハーフなのに、偽名で刑事やってるって……  
バレる！」

赤毛の娘の悲鳴のような声。

4人の上には紫の花が風流に散っていたのだが……  
気にとめる奴はいなかった。

同刻 別の場所。

「アヤちゃん、知ってる？ 宝石『パンドラ』のルーツ」

「……パンドラのルーツ？

私は知っているが、……キヤスカは知らないだろう？」

金髪碧眼の少女の問いに、右目に大きな黒い眼帯を着けた、若い人間が答えた。

それに伴い、キヤスカと呼ばれた少女の、杖を磨く手が止まる。

ここは、犯罪組織のアジトだった。

「『パンドラを上手に使えば、人を不老不死に出来る』……」。

昔、ある人が、そういう言い伝えを知ったの。

その人はパンドラの言い伝えを、どんどん調べていった。

そしたら、宝石パンドラは、元は、とある剣に埋まっていた宝石だったことが判明したんだ」

金髪の少女のスラスラとした説明。茶髪の少女が突然割り込んだ。

「その剣のことは知ってます。

その剣の柄に、パンドラは埋めこまれていたんですよね？」

「そうだよ。

そして、柄に埋まっていたパンドラは、ものすごい魔力を持っていたんだ。」

その剣で斬られた人ではない者は、人生を一からやり直す事を条件に、ニンゲンになることができた。

パンドラは、剣にそんな魔力を与えていたんだ。  
でも、今からだいぶ昔……、パンドラは剣から外れちゃったんだって」

「その後、剣から外れたパンドラは、人に対しても魔力を発揮することが分かったんですね？」

人外の者の生涯を変えることが出来るぐらいだから……  
人間に対しても何か効果を発揮するかもしれない」

「そう。」

だから、パンドラの魔力を調べる人がいて、そして言い伝えが残っていつて……

長い年月の後、その言い伝えを、さらに調べる人がいた」

少女の言葉に、眼帯の若い人間が静かに言った。

「そう。」

そして、そのことを知ったその人は、行方不明になったパンドラを探すため、犯罪組織を作り上げた。

それがすなわち『黒の組織』。

行方不明となった宝石パンドラの探索以外にも目標を置いた組織だったが、一年と少し前に壊滅し……」

「そして組織のボスである『あの方』は自害。

で、黒の組織の生き残りが作り上げたのが、我々の組織。

まさか、結成から1年ちよつとで、桜ちゃんが脱走するとは思わなかったけどサ」

眼帯の人間が幼女をにらみつけ、幼女は肩をすくめた。

「……ま、宝石が剣に埋まってた時も色々と言説があつたみたいだよ？」

それこそ、かなり古いお話だけど……

魔女が勇者に斬られそうになり、その息子がかばって殺された話とか。

息子が死んだ時、その上に風で飛んだ花がたくさん降ってきたんだって。雪みたいに。

風花だね。

ならこれは……」

と、幼女は氷のような物で出来た、小さな花をつまんだ。

「これは、水花と言つべきかな？」

……否、氷でなく、その花は水で出来ていた。

しかし、その水は花としての形を保っている。

幼女はボタンほどの大きさのそれを見、微笑んだ。

同刻 別の場所。

「クリストファーさん。行きますよー」

長い茶髪をポニーテールにした少女が、セミロングの銀髪の少年に呼びかけた。



「あ、はい……」

それに振り返って答える、銀髪の少年。

ここは都内の、ある廃工場の敷地の中。

確かに外国人名で呼ばれてもおかしくない風貌をしている少年は……

駆け出そうとしてフト振り返り、背後を見やる。

廃工場の敷地の片隅。

禍々（まがまが）しいまでに大きな、桜の樹。

ここは、少年の大切な家族同然だった仲間、浦上千恵が眠る場所。

「桜、か……」。

千恵さん。俺も……」

誰にも聞こえない英語で小さく呟き。

少年は、バツと回れ右をして仲間のもとへ駆け出した。

彼の行く先、彼に呼びかけた茶髪の少女と、無言の茶髪の少年が立っている。

そしてまた、或いは。

「ゆ、優樹ちゃん。探したんだぞ……」

杯戸公園に植えられた桜の前に立つ少女に、中森銀三に変装したキッドは声を掛けた。

「探す？ 病室のベッドの上に

『杯戸公園の桜を見に行つてきます』

……つて書いたメモ、残しましたけど」

「うっ……」

言葉に詰まるキッドに、水色のワイシャツに長ズボン姿の優樹は振り向かず、なお言った。

「ちなみに、『2時までに帰ります』とも書きましたよ？

それほど心配ですか？

私は貴方がここに来る事を見こしたんです。

2人で大切な話がしたかったから。……キッドさん」

……銀三に変装したキッドは、その姿のままため息をついた。

「よく分るね。

君は……」

「中森さんはそんな簡単に気配を殺せませんから。

……歩き方は、性格や……あと、実力も示します。

病院で一度見て、会話も出来たから……大体。

警察が、ガキ相手に馬鹿な振りするとは思えませんし」

「ナルホド……」

キッドは思う。この少女は普通のように、普通とは違つ……と。

普通とは違う天性の力と、訓練によって培われた人を殺せる力を持つていながらも……その世界で生きるには不要な優しさと弱さ。異常な環境下で、暗殺者となるために育てられたのならば……『奇跡的』とも言える性格。

キッドは、言った。

「優樹ちゃん。今は君をそう呼ぶよ？ 君が自分につけた名前だ」

「ええ。」

桜の名前は使いたくない……と、私はそう思って改名しました。桜は……『桜の下には、死体が眠る』って、言い伝えみたいなのがあるでしょう？

死人を出したくなかったのに、私のせいで……

目の前で知り合いが転落死するなんて、思いたくなかった……」

とんでもない台詞。

キッドはあわてて聞き返した。

「し、知り合い！？

あの時、転落死した男性は……君の知り合いだったの？」

「ええ、おそらくは。

私の前に落ちてきた時、顔が見えたんです。

ショックで気を失ってしまったけど、間違いないでしょう」

「……」

沈黙するキッド。

突然、もはや優樹となった桜は振り返った。

その目には涙が浮かび、左手でワイシャツの胸を強く握りしめている。

「キッドさん。

ホントは……私、脱走したときは、まっすぐ警察を頼るつもりでした。

ベアーデ・クロウから脱走した時、カインって名前の、ドラキュラの男の子が、私の脱走を見逃してくれて……。

その上、情報をくれたんです」

「情報？」

「ええ。

『真田亮史という刑事は、実はドラキュラのハーフだ。偽名で刑事をやっている。

僕が、犯罪組織に入ったことも知っているから、そこを脱走したと言えば保護してくれるはずだ』って……。

頼ろうとしたんです！

脱走した後、まっすぐに警視庁に行って……でも、追っ手が張り込んで……

殺されそうになって、あわてて逃げて、拳銃をひったくった上、やっとなんかことが出来て、

そして、……線路沿いのフェンスの下に、貴方がいた。

私はそのとき思ったんです。

警察に近寄れない以上、怪盗見習いになって……」

「その、黒の組織の残党が作り上げた組織を倒したい。と？」

「ええ、キッドさん。

勝手なお願いだと分っています。

こういう形で私が怪盗見習いになるための試験が終わり……  
いえ、試験が始まる前に、目の前で起きた転落死事件でお流れになった。

キッドさん、貴方が私を保護してくれて、私の提案を聞いてくれた後、

貴方は『顔を知られたものに、怪盗の資格は無い』って言いましてよね？

だけど……私は学びたいです。貴方の技術。だから」

「怪盗見習いになりたい。そうだね？」

「ええ……」

キッドは静かに近寄り、訊ねた。

「その……転落死した男の人は、大切な人だったんだね？」

「ええ。8歳の冬に母さまが死んでからの、私たちの世話役でした。今日が私の12歳の誕生日ですけど……」。

黒の組織がつぶれる前から、ずっと、世話役をやってくれたんです」

「ああ、そうか……そうだったね。

ごめん。忘れてたよ、優樹ちゃん」

この少女の誕生日が4月4日なのは、保護したときに本人が話してくれた事実。

皮肉なのだろうか、このように12歳の誕生日を迎え……  
しかもその子を保護した自分が、それを忘れてしまうとは。

キッドは膝を地面に付け、もはや優樹となった桜の肩に優しく手を添える。

「優樹ちゃん。」

大切な人が殺された時にどう思うかは、自分自身も経験してるからよく分るよ。

仇討ち考えてもおかしくは無いと思うし……

でも……こちらの場合、殺した側に黒の組織がいた。

……もつとも、もう決着を付けるのが不可能になってしまったよ。殺人を命じた者が、自殺したから」

「……！」

それがあなたの『宝石をめぐる因縁』ですか……」

息を飲み、そして……かつてキッドが言った事を思い出し、呟いた優樹。  
「うひゃ」

キッドは、頷いた。

あまりにも有名な話だ。

1年と少し前の黒の組織の壊滅作戦、組織側に30名余りの自殺者が出た。

しかしその内、部下に何かを命ずるほど地位が高かったのは、たったの2人……

優樹はその2人の内、片方の名を、キッドに尋ねる。

「組織の……ボスに、殺されたんですか？」

「ああ……、そうだよ、優樹ちゃん。」

あの組織があまりにも大きく、捕まりにくい存在だったのを、今

の皆さんは知ってる。

その組織の残党が集まって、また犯罪をやっているのなら……放つておけない。

たしか、君が脱走した組織は……」

「アケカゼ……朱色の風で、<sup>アケカゼ</sup>朱風と書きます」

「そしてその朱風のボスは、メンバーをいくつかの部隊に分けた。そう君は説明したよね？  
そして君がいたのは、その部隊の一つ……」

優樹は頷き、静かに言った。

「『ベアーデ・クロウ部隊』……」

『チーム・ベアーデ・クロウ』と呼ぶ時も、ありますけど……」

キッドはその顔をじっと見つめ……

「優樹ちゃん。

君は強いよ。そして優しい。

でも、普通の子より強いと自覚しているなら、その力を隠したほうがいい。

人を死なせたくない気持ちがこれからも変わらないなら、なおさら、ね……」

「……」

「そしてその人たちを守るとき、その力を使った方がいい。

普通に君が学校に通えるようになった時、君を怪盗見習いに認めるから。」

ただ、他の人をだますことになるけど……」

「……それで、いいです。キッドさん。  
協力してくださるんですね、あけ……」

と、優樹は不意に声をひそめた。

「キッドさん、人がいます。」

こちらを睨みつけてる。ビルの上。

多分中森さんじゃないですか？ 雰囲気……」

「えっ……」

思わず顔を上げかけたキッドを、優樹は目で制す。

「私が泣きかけているのをどうにかしようとして、キッドさんは自分のバカ話をした。」

階段から落ちた話とか。

私は中森さん本人の話だと思ったけど、実はキッドさんのでっち上げ。

そついう会話だったと、証言しましょうか？」

つまりそれは、この少女が、警察に対しウソの証言をするということだ。

「……」

一瞬、無言で思考したキッドに、優樹は告げた。

「これだと、一応私でもどうにかかりますし。」



……顔上げてください。

今、気がついたふりして逃げて」

キッドはバツと顔を上げた。

屋上の中森と、キッドが変装した公園の中森。  
目が合い……

瞬間、公園のほう逃げ出す。

「……？」

優樹は振り返り……固まったフリ。

「……！……」

中森が無線のような何かを手に持ち、怒鳴っているのが公園からよく見える。

ここに刑事が来るのも、もうすぐだろうと思いつつ、視線を変え……

ザッ……

唐突に吹いた風と、満開の桜。

外灯に照らされたそれは、自分にも降りかかる。

闇の中の白い花。

そこに漂う、死の記憶。

風と共に舞うその花の名は、桜。

この日。

桜は自分の名を捨てた。

この日、桜は優樹となった。

おそらく、この名はずっと使うのだろうと、12歳になったばかりの彼女はぼんやりと思い……

もはや永遠に年を取らぬ、自分の目の前で転落死した、元世話役の名を呟く。

「かなで兄さん……」

風に舞い、散りゆく花。

風花。

きっと、何かを失った思いは。

負の感情を象徴しているのかもしれない。  
風花と死を軸にした運命は、紡がれゆく。

群像劇は既に始まっている。

むなしさと悲しみ、そして、

失くした者の喪失感。

舞う風花が見ているのは、何なのか。

……ちなみに、それから2時間後。

「2週間連続で同じ階段から落ちて骨折だど？」

ガキに何ででっちあげの話を吹き込んだんだ、キッドのヤロー…  
…」

警視庁。捜査二課の一角。

中森銀三の怒りの声が響いていた。

## 第1章 4月 〓 出会いと桜 最終節〓（後書き）

〓 作者より〓

この節は、変更箇所が結構あります。

誤植や表記ずれ、会話の訂正とルビの追加以外には、

- ・ドラキュラの隠れ里のシーン、登場人物の身長を変えました。
- ・次の犯罪組織のアジトのシーン、宝石パンドラの設定を一部変更しました。

（旧版書いた当時、まじつく快斗の3巻の設定を呼んだことが無く、一部設定がずれていたので）

・さらに次の廃工場のシーン、銀髪の少年の言葉をロシア語から英語に変更しました。

…… 何と言いますか、一番最後の中森警部の怒りのシーン以外、全部訂正が入っているわけですが（汗）

なお、桜が脱走した部隊の名称は、これまで『ベアーデークロウ』と表記していたことがあったのですが、

今後は『ベアーデ・クロウ』で統一することにしました。

様々な出来事があった第1章は、次の節で最後です。

6月9日追記：犯罪組織のアジトのシーン、登場人物の会話を一部変更しました。

分かりにくかったパンドラ伝説に補足を加えた上、

眼帯の女性の名をミコちゃんからアヤちゃんに訂正しました。

（当初、改版掲載時に修正予定だったのですが、忘れたまま放置されていたので）

## 第1章+

### 「偽名の刑事」

4月4日午前1時28分

カツ・カツ・カツ……

「全く……なんで僕が、名指しでこんな時間に呼び出されるんだ……？」

杯戸町、雑居ビルの真夜中の階段。

まじめそうな青年が、1人でそこを上っている。

蛍光灯しか明かりが無く、ほとんど真っ暗といってもいい状況下

……

足音を響かせながら、彼はポツリとボヤいた。

……と、彼の足が止まる。

微かに見える明かりと、聞こえる数人の話し声は、呼び出された場所からのもの。

彼は一瞬逡巡し……やがて屋上に向け、足を速めた。

彼の名はシオン・チャールコリオール。現在21歳。7月15日生まれ。

戸籍上の偽名は、さなだりようじ真田亮史。現在22歳。7月15日生まれ。

彼は、ヨーロッパ系ドラキュラと日本人のハーフ。そして。

彼は、警視庁少年課の刑事だ……

「本庁少年課、真田……」

「ああ、あんたか！」

名乗ろうとした途端の、左方向からの大声。

ぎよつとしてそちらを見ると……

見知らぬ、だが一目で同じところに勤めていると分かる、背広の中年がすぐそばに立っていた。

4月1日付で今の職場に配属されたばかりの亮史は、少年課の上司の顔は完全に把握している。

とすると、他の課の者だろうが……どこかで見覚えのある顔。

……亮史の反応を見、その男は名乗った。

「私は本庁捜査二課の中森銀三だ。君の名前はサナダ……」

「真田亮史です。」

捜査一課と二課の方が『大至急来てほしい』と僕を指定したそうですが……

……他の方は？」

「……君の後ろ」

中森警部の、苦笑しながらの指摘。

あわてて振り返ると、捜査一課の名物警部と……

その部下なのだろう、ひょろりとした若い男が立っている。

「捜査一課、目暮十三だ。こちらは私の部下の高木君」

目暮警部の紹介に合わせ、軽く会釈する高木刑事。

亮史は照れたように軽く頭を掻きながら……目を軽く見開いた。

なんでシエルの知り合いがこんな場所にいるんだ……？

自分と同じように、人間として偽名で暮らす弟の顔を思い出し  
不意に浮かんだ疑問。

亮史は、尋ねた。

「……ここで、捜査一課と捜査二課、両方が担当するような事件が  
あったんですか？」

瞬間。

空気が一気に張りつめた。

「知りたいか？ 何で君がここに呼び出されたか。

……その質問に答えれば、ここで起きた事件全てを、話すことに  
もなる」

「……ぜひ」

頷く亮史。

中森警部は軽く咳払いし、言った。

「今から3時間と少し前、ここから男性が転落死した」

……と、警部が指さしたのは、15メートルほど先にある、一部が欠落した白い手すりだった。

代わりに転落防止の警察のテープが張ってあるそこから、その男性は落ちたのだろう。

「……で、その男性が落ちてきた場所。そのすぐそばに女の子が座り込んでいた。

『目の前に転落死体が落ちてきて、びっくりして気を失ってしまった』」

……って、その女の子が証言している。

状況から言っても、それは間違いない事実だと、我々は判断した。  
……ここから先は口外禁止の話なんだが」

中森警部は亮史の顔を見つめた。

頷く亮史を見、また口を開く。

「怪盗キッドって知ってるだろう？」

昨日、警視庁あてに予告状が届いた。それによると……

どうやらキッドの見習いになりたがっている奴がいて、そいつを見習いとして認めるために、キッドは『試験』をやるらしい。

その試験は、都内を舞台とした、警察と、見習いになりたがっている少女との追いかっこ。

『見習いになりたがっているその子が無事逃げおおせたら、見習いとして認めるので、協力していただきたい』

キッドのヤロー、こんなふうに書いていたんだ」

「……その試験があるのは、いつです？」



「4月3日の午後10時から、5時間。  
本来なら、今も追いかけて続いていたはずなんだ。  
だが、その見習いは警察病院に搬送された」

「……病院？」

「そう。ちょうど10時前にその見習いは発見されたんだが……  
このビルの真下、公園のフェンスに寄りかかったまま、意識が無  
かった。

目の前に『若い男の転落死体が落ちてきて、驚いて気を失った』  
のが原因だ」

「……！」

「つまり、だ。

怪盗キッドの見習いの少女が、午後10時からの追いかけてこの  
ために、このビルの真下に座り込んでいた。

が、その追いかけてが始まる直前、目の前に男性が落ちてきた。  
そしてその少女は、転落死体を見たショックで失神。  
それを我々が発見した……という訳だ」

「なるほど……」

と、亮史は頷きかけ……ハッとして言った。

「でも何で、僕がここに呼び出されたんです？」

中森警部はごほん、と軽く咳をした。

「……真田君、カインという名に心当たりはあるかね？」

「カイン……？」

腕を組んで考え込んだ亮史。  
少しの間を空け、言った。

「心当たりはない、と思います。

……その名前、どうかしたんですか？」

「……実は警察病院に運ばれた少女、意識戻ってしばらくしたら脱走したんだ」

「えっ？ ……脱走？」

「そうだ。

病室に、少女が書いたメモが残っていたんだが……  
そのメモに君の名前が書いてあった」

「僕の名前……が？」

そのメモ、どんな内容だったんですか？」

亮史の当然の問い。

中森警部は内容を暗唱した。

「『杯戸公園の桜見に行っています。2時までに戻って来ます。  
それから、警視庁の少年課に、サネダもしくはサナダリョウジと  
いう名前の、

配属されてから日の浅い刑事さんはいらつしやいませんか？

“私は以前、カインが所属している所にいた者です。

訳アリでキッドさんの見習いになりました”と、その刑事さんに伝えていたきたいのです」

メモの内容は以上だ。

……今言ったから、伝えたことになるな」

少女がメモに書いた刑事は、間違いなく亮史のことだろう。

メモの内容に該当するような刑事は、亮史しかない。

だが、

「『カインが所属している所』？」

亮史は首をひねり、その様子を見た中森警部は彼に背を向けた。

「……ま、わざわざこういうふうに書いてるんだ。

君が思い出せなくても、メモを書いた本人に聞けば……」

首筋を掻きながら、手すりのほうに足を向け、そう言つ中森警部。  
手すりを軽く握り、下方にある公園を見る……

と、その時。

突然、物凄い殺気と怒気を発しながら、中森警部はつめいた。

「何だ、あれは……」

「……何かあったんですか？」

長めの沈黙の後、見かねた高木刑事が声を掛けたと同時に、中森警部は無線を取り出し、怒鳴った。

「こちら、中森だ！」

転落死事件現場の屋上から、ワシに変装した怪盗キッドを発見、ヤツは杯戸公園にいる！

A班は身柄確保！

B班は国道へ回り込め！

C班は優樹を確保しろ！……怪盗見習いユーリアの名だ！

あのガキ、『戸籍が無い』とか言って、

……警察病院で、今後どう名乗るのか決めやがったんだ！」

「……！」「」

驚いて手すりに駆け寄る3名。

同時、中森警部は現場に向かうため、その場を駆け出した。

背後、階段を駆け下りる中森警部の足音を聞きつつ、亮史と、高木刑事、目暮警部が見たのは……

杯戸公園横の道を、物凄い勢いで走る背広の男。

遠目にも、中森警部に似ているのが分かる。

「うわ……」

亮史は思わず呟いた。

とてつもなく速い追いかっけが、そこで繰り広げられている。

「あ……、あの、そのカインの件の確認で、君を呼び出したんだけど……」

と、あっけにとられて下方の公園を見る亮史に、しばらく経って高木刑事は言った。

「あ、そうだったんですか」

「……他にも、もう一つ、確認したいことがあったんだけどね」

「……それは？」

向き直る亮史。

高木刑事の口調が、急に変わった。

「僕は、現在中学3年になっている男の子と、知り合いなんだ。ちょうどその子が中学1年の終わり、事件の関係で知り合ったんだけど。」

『黒の組織』って知ってるだろう？

その子もある意味で、被害に遭っていた。

で、僕がピンチになったとき……その子がスゴイ方法で助けてくれた」

（作者注：ここらへんの話は、『金髪なりし少年の想い』で書く予定。

かなり迷ったのですが、高木刑事にこのセリフを言わせることにしました。

そうしないと、このストーリーが意味不明になっちゃいますし）

……と、高木刑事は言葉を切り、更に言う。

「その子は、浜口君っていうんだけど……」

その子のお兄さん、今はどこかで警察官として働いてるらしいんだ。

少なくとも、浜口君が中二の時点で、そのお兄さんは警察学校を卒業済みらしいから。

そのお兄さん、警察学校入学と前後して……

『養い親を突発的な災難で亡くして身寄りが無い』って、浜口君が言っていた」

「……」

亮史の背中を冷や汗が走った。

この刑事が自分の正体を暴こうとしているのは明らかだ。  
つとめて冷静になろうとして、考える。

何でシエルの野郎そんなことしゃべるんだ……？

亮史は、確かに養い親を二人とも、警察学校入学式の日に亡くした。

なぜなら。

「そりゃあ僕の養父母は強盗に殺されましたけど……  
ドラキュラだって証拠がどこに……」

ゴホン、という目暮警部の咳。  
重苦しい沈黙。

高木刑事は言った。

「ドラキュラ？」

浜口君がドラキュラだって、僕は一言も言っていないよ？」

「あ……」

自分が墓穴を掘った事に、亮史は気付いた。  
そして高木刑事は、なおも言う。

「その、お兄さんの本名を、シエル君は教えてくれた。  
それは……」

もはや、誤魔化すことは出来ない。

亮史は、高木刑事が言うはずの人名を、先に言った。

「シオン・チャーコリオール。

……よく分かりましたね。

僕がドラキュラのハーフだって」

会話はさらに続く。

「『今から8ヶ月前の夏。

ドラキュラの隠れ里に暮らす、カインという名前の12歳になったばかりの少年が、家出した。

そしてカインは、ある犯罪組織に拾われた』

……シエル君がそういったことを話してくれた」

と、目暮警部。亮史は答える。

「……だから僕はそのことが許せず、少年課への配属を希望したんです。

カインに対し、『このことを許さない』という、意思表示になる  
と思って。

おそらくカインは、拾われた犯罪組織で、僕のことを話したんで  
しょうね。

少なくとも……その、怪盗見習いの……ユーキちゃんに。

そのユーキちゃんが、どういうワケか怪盗見習いになって……

そういう状況下、僕を、頼ろうとしていたのかも知れませんが」

……そこまで言って、亮史は高木刑事を見据<sup>みす</sup>えた。

高木刑事より、ほんの少しだけ低い身長。

少しだけ顔を上げて、睨む形になってしまう。

「僕のこととは秘密に出来ませんか？

そもそもシエルの件だって、まともに報告行っていないでしょう？

僕はカインの件が解決すれば、いいと思っています。

婚約者が25になった時に、お互いの仕事辞めて、隠れ里に引  
越すつもりだったんですし。

僕は、人間の真田亮史として働いてるわけで……」

「君も、人間の血を吸うんだろう？」



「いえ……」

特異体質で、直接吸うと胸焼け起こしてしまうんで……  
知り合いの医者から、輸血パックもらって命をつないでいる状況です」

亮史は、短く息を吐き、さらに言った。

「万に一つ、僕がドラキュラとして働くことになったら……  
そのときは辞表出しますよ。」

警察が『市民の公僕』である以上……  
人間として働く方々に対する、侮辱になると思いますから」

「……！」

自分を真っ直ぐに見据える目。高木刑事は微かに息を飲んだ。

真田亮史の顔に……シエルが一瞬ダブったのは、彼らが実の兄弟だからだろうか？

## 第1章+

### 「偽名の刑事」(後書き)

「作者より」

オリキャラの名前、旧版では『シオン』チャコリオール』だったのですが、改版より『シオン・チャコリオール』に変更しました。以前タイプをミスしてから、ずっと修正の機会がなかったのです。なお、セリフなどいくつか変更させてもらいました。

「中間回想／／中森銀三・3日後／／警視庁」（兼粗筋）

たとえば、どんな者であろうと。

実の母が行方不明になれば、心配するだろう。

ましてや、平和に暮らしていたのに犯罪に巻き込まれたと知ったら、なおさらだ。

大切な人の無事を、ただ信じるしかなく。

それでも……

最悪の事態を考えてしまうのが、人間だから。

有希子の失踪事件に関しても、それは変わらない。

夜中の1時に目暮警部に連絡を取る、という行動。

……非常識な行動ではあるが、新一は有希子を心配していた。

『チーム・ベアーデ・クロウ』と名乗り、工藤家に電話してきた者は……

声色から考えて、おそらく子供。（第1章第5節参照）

だが、何らかの犯罪組織につながっていることが、容易に想像できたのだ。

4月4日、午後2時。警視庁で始まった協議。

協議の時間が長時間にわたるのは当然だったと、今更ながら思う。有希子の命に関わるそれは、とても明るいとは言えない内容だった。

協議の場で、中森警部は回想する。  
怪盗キッドの見習い少女の、事情聴取の模様を……

~~~~~

4月4日 午前10時

警視庁の取調室は、テレビの刑事ドラマで頻繁に登場する場所だ。  
大抵の場合、逮捕された犯人が、泣きながら自供したりする。  
……そんな、お決まりのシーンが繰り広げられる部屋なのだ。

……もつとも、現実の取調室の中、中森警部が向かい合っている  
犯人は、泣いていなかった。

それどころか、逮捕すらされていなかった。

ある意味で、それは当然だった。  
取調室で事情聴取を受けている相手は、12歳の少女なのだから。  
補導されることはあり得ても、逮捕されているはずがなかった。

だが、中森警部を含む数名の刑事達が放つ殺気は、全て、その少  
女に向けられている。

鈍い神経を持っているのか、図太いだけなのか、単なる強気なの  
か……

周りを刑事に囲まれているこの状況下、少女は、全く萎縮した様  
子を見せていない。

彼女が着ているのは、杯戸公園で保護された時の水色の装束でな  
く、白いブラウスに長ズボンだ。

ピンと背を伸ばしパイプ椅子に座り、中森警部と向き合っている。

別に、彼女は嘘をついているわけではない。

一応、受け答えは素直なほうだろう。

だが、中森警部は、はっきりとイラついていた。

というのも、少女は肝心な部分の話題になると、徹底的に黙秘するからだ。

それこそ、口を閉じたまま開かない二枚貝のように。

事情聴取で分かったことは、少女のあまり重要ではない証言と、

……少女が警察に対して、あまり恐れを感じていないという事実だけだった。

「えーっと……」

君の証言を確認するね？」

「ええ」

中森警部の言葉に少女はうなずき、警部は調書を握りしめた。

「君は戸籍がなくて、色々な経緯で、怪盗キッドは君を拾った。

君が以前いた場所には、カインという人物がいた。

そのカインという人物は、少年課の真田亮史刑事についてよく話していた。

……君は、行くところが無かった。

だから君は、ユーリアという通り名でキッドの見習いになりたがった。

でも……怪盗キッドは君を見習いにするかどうか決めかねて、試験をすることに決めた。

……間違いないね？」

「ええ」

少女は再びうなずく。

中森警部の、調書を握る手に力がこもった。

「その試験とは、見習いになりたがっている君と、我々警察との追いかっこ。」

試験の時間は、きのうの夜。

……つまり4月3日午後10時から、5時間。

試験範囲は、東京都内全域。

時間内に警察に捕まらずに、屋外を逃げ回ることが出来れば……君は、キッドの見習いになれるはずだった。

……間違いないね？」

「ええ。」

間違いないです」

3回目もきちんと返答を返した少女。

中森警部の手に、更に力がこもった。

「だが、その試験は始まる前にお流れになった。」

杯戸公園のフェンス前に座っていた君の、目の前の雑居ビルから

……男性が、落ちてきたから。

その転落死体を見て、君は失神した」

中森警部は、今度は何も言わずに視線で少女に確認した。

少女はうなずき、言った。

「その後、私がどうなったのかは、そちらの方が詳しいと思います」

が。

気がついたら、病院のベッドの上で寝ていて……

看護婦さんの質問に答えた後、私の病室に、中森さんが来たんです」

中森警部は首を縦に振って肯定した。

この少女がその時、病室で何を話したのか、彼はきちんと覚えている。

「君は、私にこう話したよね？」

ユーリアという通り名は、君の昔の知り合いのものを、勝手に名乗っているだけだ、と。

そして、君はこれからどう名乗るのか、私の目の前で決めた。

じゃあ、その知り合いって……」

「死にました。

…… 去年の、春ごろに」

「死んだ？」

「ええ。

看取ったわけじゃないから、詳しい話はあまり知らないけど……  
私は、その人になついていたから」

中森警部を見つめる、少女の目。

中森警部も少女を見据え、言った。

「我々警察が知りたいことは2つ。

君が怪盗キッドに出会う以前にいた場所の具体的な情報。

そして君がキッドと知り合った経緯だ。

忘れているはずはないだろう？

君は……、キッドの見習いになろうとしたんだから」

「私がキッドさんに出会う以前、どんな所にいたのかは言えませんが……詳しい、出会った経緯を知りたいんですか？」

少女の問いに中森警部は答える。

「当たり前だ」

中森警部は、長い間キッドを追い続けている。

当然、キッドに対する執念の強さは、自他共に認める所だ。

だがこれまで、中森警部はキッドの周辺人物すら捕まえたことが無い。

……それだけ、キッドは強敵なのだ。

中森警部は、何かキッドに関する重大な情報を持っていないかと、少女に期待していた。

13歳未満の、この少女を警察に置いておけるのは24時間が限度。

警察病院から脱走していた少女を、杯戸公園で保護、補導したのが4月4日午前2時。

30分間の事情聴取の後、眠そうだったので休ませて、朝起きてから2時間の事情聴取。

少女の事情聴取ができる時間は、あまり残されていない。

「私は……、道走っていて、フェンスを乗り越えて。

フェンスの下にキッドさんが座り込んでいて、私はそれに気付か



なくて。

……思いっきり激突して。

今更考えてみると、行き当たりばったりな出会いでしたね。ええ」

「……遠い目で言われても困るんだが。何月の何日だったんだ？」

「4月の最初の日の、夜でした」

「4月1日の夜？ 何時ごろ？」

「そのとき必死だったから……。分からないです」

「ちょっと待て。

出会ったのが4月1日の夜。

警察に、速達で予告状が届いたのが4月3日の昼。

おそらく、予告状が郵便局に投函されたのは4月2日。  
期間が短すぎないか？」

中森警部の問いに、少女はあっけらかんと答えた。

「最初、私もキッドさんに言っただですよ。

『そんなに私を信用していいんですか』って。

そしたら、

『君の力を、早く見極めたいからね』……って、キッドさんに言われて」

「力を、見極める？」

「ええ」

保護された時の水色の装束でなく、白いブラウスをまとった、優樹という名の少女は、はっきりと肯定した。

まるで、キッドからそう言われたことが、誇りであるかのように

……

~~~~~

「……警部！ 中森警部！」

新一の呼び声に、中森警部は我に帰った。

ハッとして周りを見ると、ここは警視庁の一角、小さめの会議室。周囲の人間が、書類を握ったままボーっとしていた中森警部を注目している。

ここにいるのは、新一、小五郎、蘭、英理、そして急遽帰国した優作。

捜査一課の高木刑事と目暮警部。

少年課の真田刑事と、中森警部が初めて会う者だが……同じく少年課の臼井警部。

捜査二課の代表としては、キッド担当の中森警部が出席していた。

「そういえば中森警部。

何で捜査二課の貴方がここに？」

小五郎の問いの意味は分かる。

少なくとも工藤有希子行方不明のこの事件に、捜査二課は関わり

がないように思えるのだろつ。

だが、実際は違う。

工藤有希子を誘拐した男が死んだ。ハイドコーエンのすぐそばでねえ。

メグレっていう警部が担当になってるからね。その男のポケット探りな……

工藤邸にかかってきた電話の内容を思い出しながら、中森警部は言った。

「電話の指示通り、転落死した男性のポケットの中には、カードがありました。

カードの裏に書かれていた、丸の中の五芒星に、3本の斜線マーク。

そして背中に、それと同じ刺青いれずみをした少女を、捜査二課が補導しました」

「その少女、捜査二課と関わりがあるんですか？」

新一の問いに、警察代表のほとんどが頷き、中森警部は説明を始めた。

警視庁だけに届いた怪盗キッドの予告状、見習いになりたがった少女、試験の顛末……

そして、その少女が、事情聴取中に黙秘したこと……

優作と新一は考え込み、小五郎と英理は顔をしかめ、蘭の顔には戸惑いが浮かぶ。

……一通り説明が終わった時、新一は言った。

「母の車の下と、転落死した男のポケットの、カードの文句はほぼ同じ。」

……ただ、訳された英文が書いてあるか、いないかの違い。

裏面のマークも、丸の中の五芒星に3本の斜線。

そして、怪盗キッドが拾ったという少女の背中の刺青も、いれずみそのマークと同じだった。

つまり……」

新一のセリフを、優作が引き継ぐ。

「怪盗キッドの見習いのその少女は……」

有希子の失踪事件に、何らかの形で関与していた可能性がある」

運命は紡がれ、交差する。

群像劇の主人公達は、動き始めている。

様々な思惑を胸に、主人公達は動き始める。

丸の中の五芒星に、3本の斜線。

熊のツメの、名を冠した者達の象徴。

この象徴を中心に、主人公達の運命は動き始める。

「中間回想／／中森銀三・3日後／／警視庁」（兼粗筋）（後書き）

（作者より）

この物語は、各章の間に、登場人物の『中間回想』が入る形式になっています。

CNRの旧版では、これまでのあらすじを書くこととして日付を間違え、ご迷惑をお掛けしました。（汗）

改版では、中間回想の後書きにこれまでのあらすじをざっと書いてみようと思います。

（やや実験的ですが……）

以下、第1章のあらすじですが、相当長いのでスルーされても結構です。

・4月1日

午後11時：都内某所の線路脇にて、キッド、謎の少女と遭遇し、助けを求められる。

（第1章第1節）

・4月2日

午前1時：少女を探していたベルモット、ビルの屋上にて、携帯電話で魔女のキャスルと会話。

キャスルの追跡魔術が『白い何か』の妨害でシャットダウンされ、2人は少女の追跡を断念。

ベルモットの境遇判明。“黒の組織”時代の仲間によって、強制的に拘置所から連れ去られていた。

（第1章第2節）

同刻：キッドと寺井、隠れ家で少女から事情を聞く。

少女の名前、生年月日、境遇など判明。

少女の名前は桜（コードネームは“アイリス”）。

桜は、“黒の組織”の残党が作った犯罪組織、“<sup>アケカゼ</sup>朱風”から脱走したという。

キッドは桜の話を信用する。

彼女はキッドと遭遇直前、追っ手の拳銃をひったくっていた。

その後、桜はキッドに対し、とある提案をする。

（第1章第2節）

桜の提案は、『自分がキッドさんの見習いになる』ことだった。

キッドは提案をすぐには受け入れず、見習いになるための試験の実施を逆に提案。

一晚、警察と追いかけてこをして、顔を見られずに、警察から逃げおおせたなら、桜を本当に怪盗見習いと認めると告げた。

（第1章第3節で判明）

朝：（キッド、『怪盗キッド&怪盗見習いユーリア』の名の予告状を、速達で警視庁に送る

（中間回想で判明）。）

・4月3日

昼：（警視庁にキッドの予告状が届く（中間回想で判明）。）

午後9時50分：試験開始直前、杯戸公園敷地の隅に座り込んでいた桜の、目の前の建物から男性が転落死。

桜の悲鳴をキッドは盗聴機越しに聞き、警官に変装した上で杯戸公園に駆けつける。

水色のマントにシルクハット姿の桜は、死体を見たショックで、公園の桜の木の下、フェンスにもたれかかったまま失神していた。

キッドは、警察無線で中森警部に連絡。

怪盗見習いユーリアこと桜は、警察病院に搬送される。

男性の転落死事件は捜査一課に引き継がれた。

（第1章3・4節）

・4月4日

深夜：病院のベッドの上で、桜は目覚める。

（第1章第5節）

午前1時：病室にて、中森警部は怪盗見習いユーリアこと、桜と面会。

桜は自分が戸籍を持っていない事に気づき、その場で自分の、戸籍上の名前を決める。

その名は『優樹<sup>ゆつき</sup>』。中森警部も渋々だが、それを認めた。

（第1章第5節）

その後、桜は枕元にメモを残し、警察病院から脱走。

同刻：工藤有希子行方不明のままアメリカから帰国した工藤新一、電話に叩き起こされる。

電話相手の声色は、おそらく女で、子ども。

だが電話相手は、「工藤有希子さんを助けたいですかあ？」と問うた。

更に電話相手は、

「今からちよつと前、工藤有希子を誘拐した男が死んだ」

「メグレっていう警部が担当になってるからね。その男のポケット探りな。」

アンタの母親の車の下にあったカードの、訳詞を書いたのが入っているからね」

などと新一に告げ、一方的に電話を切った。

電話の内容を受け、新一は目暮警部に確認の電話を入れる。

（第1章第5節）

午前1時30分：警察病院から脱走した桜、杯戸公園で、中森警部に変装したキッドに接触。

キッドは、桜に、自分の『黒の組織との因縁』が何なのかを明かした。

一方、桜は、転落死した男性が多分自分の知り合いだということキッドに明かし、その上、「もう桜の名を使う気はない」と告げた。

4月4日の誕生日。桜こと優樹は、12歳になっていた。

（第1章最終節）

一方、杯戸公園すぐそばの男性転落死現場に、突如、少年課の真田刑事が呼び出される。

病院から脱走した怪盗見習いユーリアが、病室に残したメモに真田刑事のことを書いていたという。

真田刑事は、中森警部の問いに、知らぬ存ぜぬを言い通す。

だが高木刑事、目暮警部の2名の誘導に引っかかり、自らの正体を自白。

真田刑事は人間でなく、偽名で人間として暮らしている、吸血鬼のハーフだった。

（第1章＋）

6月9日追記：上に書いたあらずじにいくつか誤植があり、今回訂正しました。



## 第2章 5月 く壮絶なる独白 第1節く

5月20日 午後1時 賢橋町

5月も下旬になると、春風はうつすらと初夏の匂いをおびる。  
そんな昼下がりの、のどかな時間。

賢橋町内を、1台の車が走っていた。

車を運転しているのは、30代ぐらいの男。助手席にも、同年代の男が座っている。

一方、後部座席には、やはり30代ぐらいの女と……  
10代前半の少女が座っていた。

少女の名は、優樹。年齢は12歳。

つい先日、家裁の少年審判で処分無し of 決定を受け、なおかつ自分自身の戸籍を得た少女だ。

警察にしてみれば、怪盗キッドの見習いになろうとしたものは補導されて当然……  
という認識だったらしい。

この件で児童相談所に通告を行ったのも、当然のなりゆきだ。  
そして児童相談所も、警察とほぼ同じ認識をもっている。

怪盗見習いになりそこなつた少女が鑑別所に入ったのは、4月6日のことだった。

そして彼女は、少年審判を受ける身となった。

……もつとも、審判でどのような判決が下ったとしても、身寄りのない少女が、どこかの施設に入るのはほぼ確定していたが。

少女自身も、そして周囲の人達も……

この審判の判決は処分無しか、そうでなくても、せいぜい保護観察だろうと思っていた。

怪盗見習いになろうとした身とはいえ。

少女が何かを盗んだわけではないし、誰かを傷つけたわけでもない。

予告状を出し、警察を騒がせたのは、あまり良いことではないだろう。

だが見習いになるための試験は、始まる直前で中止になっている。

……つまり少女は、何一つ、法を犯してはいないのだ。

そんな審判の判決が5月中旬まで延びたのは、2つ、理由があった。

それは、少女の本名が分からなかったことと、少女の過去が全く不明だったこと。

……まあ、名前は、あまり問題にはならなかったが。

そもそも、戸籍のない少女の本名が分かったところで、身元が分かるはずがない。

第一、少女は名無しではなかった。

少女はすでに、便宜上の名前を自分で命名していたのだ。

そして裁判所は、その名前を使ことにした。

本名不詳。自称12歳、戸籍無し。住所不明。怪盗見習いユーリアこと、優樹。

彼女に対して処分無しの決定が下ったのは、5月中旬のことだった。

優樹を乗せた車は、白っぽい建物の、門の前で停車した。

建物の前には大きめの庭があり、何人かの子供がボールで遊んでいる。

優樹の横に座っていた女性と助手席に座っていた男性が、ほぼ同時に下車。

そして、優樹と運転席の男性が下車する。

女性が優樹の手を小さく握り、そして優樹は建物の門を見た。

建物の名前の読み方も、名前が示す建物の意味も、その門を見ただけで分かる。

「ジドウ、ヨウゴシセツ……」

門の字を読む優樹の呟きを聞いた女性は、小さく微笑み……  
そして門に刻まれた、後続く言葉を、優樹と同時に読み上げた。

「「サカムラエン」」

……児童養護施設 坂村園

今日から君はここで暮らすんだよ、と言う女性の言葉を、優樹は確かに聞いた。

同日 午後1時5分 警視庁

『先日補導された怪盗キツドの見習いの少女が、都内のどこかの施設に入所した』

……そんな情報が、警視庁捜査2課の中森警部の元に届いたのは、お昼時のこと。

ちょうど昼食を食べようとしていた、その時だった。

中森警部は茶木警視の情報で、その事を知った。

廊下を歩いていると、先月捜査2課に配属された若い刑事が、ややビクついた様子で、こちらとすれ違う。

自分が相当怖い顔をしていると、その時になって始めて気がついた。

エレベーターが間近に迫った、その時だ。

「中森警部」

背後からの、自分呼び止める声。

振り返ると、少年課の真田刑事が立っている。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第1節〉（後書き）

〈作者より〉

改版では、おそらくこの節が一番変更されていると思います。  
見ての通り、章題を旧版から変更しています。

（旧：神社の殺人 改：壮絶なる独白）

また、話の都合上、当初第2節に入るはずだったシーンを、1つこの節に挿入させていただきました。

CNRに連載していた旧版の、転載・加筆は、この節で終わります。

次の第2節では、坂村園のシーン、第3節では警視庁のシーンとなる予定。

第4節、不本意な脱獄犯扱いの女性が、やっと登場致します。

## 第2章 5月 〽 壮絶なる独白 第2節 〽

5月20日 午後1時15分 賢橋町 坂村園

家裁での優樹の審判後、福祉関連の職員は色々な手続きや話し合いや行動を取ったらしい。

その結果、怪盗見習いになり損なった少女の今後の生活の場が決まったのはきのう、5月19日。

児童養護施設 坂村園

桜の名前を使わないことに決めた優樹は、今日からこの施設で暮らすことになるのだ。

「……」

そして、福祉関連の女性職員に伴われて入った坂村園の建物の中に、優樹は、いた。

正確には、坂村園の一室で、折りたたみ式の長机の前に置かれたイスに座っていた。

「……」

優樹は無言のまま、周囲を観察する。

優樹が今座っているのは、おそらく会議室か応接室にあたる部屋だろう。

部屋は、広くは無いが狭くも無い。

大人が数人と子供一人が、四つの長机の周囲で座るには、おそらく適切な広さだ。

長机を四つ組み合わせ、正方形の形にしている以上、どこに座っても周りの視線を受ける形になる。

大人たちに見つめられながら、優樹は小さく会釈した。一瞬迷ったが、だが静かに彼女は立ち上がる。

「……これから、よろしく願います。

色々、あると思うけど……」

口数こそ少ないが、不安が垣間見えた優樹の言葉。大人たちは皆、うなずいた。

……と、不意に、目の前の優しそうな女性が口を開く。

「はじめまして。私はこの園長です。

そして、坂村園にようこそ。

坂村……優樹ちゃん。

きみの、名字についての説明は受けた？」

優樹は座り、そして言った。

「きのう、児童相談所で言われました。

これから、私の名字が無いと困るから……」

だから、私の暮らすこの施設と同じ名字の、住民票を新しく作成する、って」

優樹は心の中で、静かに自分に言い聞かせた。

私の名前は坂村優樹。

これから小学校に通う、6年生なのだ、と。

「……」

優樹が緊張していると思ったのだろう、雰囲気は少しずつ和やかになるうとしている。

この場にいる、大人のボランティアや職員の紹介を、優樹は聞く。ボランティアの女性、アブラギさん、イワヤさん、トオノさん。ボランティアの男性、シンジョウさん、ジイさん……

……！？

うつむいていた優樹は顔を上げた。  
今、聞き流しかけたボランティアの男性の名前。  
それは……

「えっと、ジ……  
もう一度、名前を言ってもらえませんか？」

優樹の質問に対し、そのボランティアの男性は、微笑んで告げた。

「寺井、と書いてジイと読みます。  
……珍しいでしょう？ 私の名字は」

同日 午後1時25分 賢橋町 坂村園

寺井は、自分の左前方に座る坂村優樹を見た。



白い上着を着た彼女は、寺井に向かって小さく会釈。

寺井も小さな会釈を返し、そして軽く目を伏せる。

周囲の大人たちは、それらを単なる礼儀と思っているのか、ほとんど気に留めていない。

寺井がこの施設にボランティアとして潜入したのは、約3週間前のこと。

桜こと優樹が入所しそうな施設を割り出し、快斗と相談した上での行動だ。

当時、優樹の処遇は未決定だったが、たとえ優樹がここに入所しなかったとしても、しばらくの間はボランティアをするつもりだった。

一度ボランティアになった以上、それは最低限の礼儀だと思ったから。

ボランティアとして潜入した際、書類を巧妙に偽ったが、それはバレてもギリギリ罰せられない範囲だ。

現に、今の寺井はかつらを着用し、口ひげもそっているが、それが仮に判明しても若作り呼ばわりされるだけだろう。

……ともかく、寺井の左前方で、桜こと優樹は他のボランティアや職員の紹介を聞いている。

和やかな雰囲気の中、特段変わった様子はないが、だが一瞬寺井と視線が合い、桜は小さな笑みを浮かべた。

数瞬後は真顔に戻る、目立たない笑み。

だが、寺井は確信した。

この少女は、間違いなく覚えている。

かつてキッドに保護された時、小さな隠れ家で、キッドと共に事

情を聴いた自分の顔を。

そして間違いなく気付いている。

キッドの手下である寺井が、この施設に潜入しているという……  
事実を。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第2節〉（後書き）

〈作者より〉

第2章第2節、別名、優樹（桜）と寺井の再会。

……実はこれ、書き始めたのが去年の大晦日だったので、実質的には投稿まで5カ月かかったわけです、ハイ。

昨年度後半は留年の危機になったりして滅茶苦茶だったので、今年はそんなことが無いように頑張ります（汗）

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第3節〉

5月20日 午後1時6分 警視庁

中森警部は真田刑事に小さく会釈し、頭の中に浮かんだ疑問をそのまま問うた。

「少年課の君が、どうしてこの階に……？」

同じ警視庁内とはいえ、少年課と捜査二課が連携する事件は少なく、関わりが薄い。

当然、少年課の者がこの場所に来ることは滅多にないのだ。

「先月の怪盗見習いの事件についての連絡で、捜査二課の方から呼び出しがあったんです。

で、捜査二課に行くと……

中森警部の上司のかたが、今日、ユーリアがどういう処置を受けたのか、教えて下さって……」

「……なるほど」

中森警部は納得した。

おそらく茶木警視が、怪盗見習いユーリアの施設入所を教えたのだろう。

あの怪盗見習いの事件には、少年課の真田刑事も関わった。大した関わりかたでは無かったが、それでも真田刑事に事後経過を説明する必要があると判断したのだろう。

「……真田刑事も、怪盗見習いの事件では大変だったろう？」

「ええ、まあ……」

中森警部の言葉に、真田刑事はあいまいな笑みを浮かべた。

今から一ヶ月前、少年課の真田刑事は、怪盗見習いユーリアの事件に突然巻き込まれたのだ。

そもそもの発端は4月4日の深夜。

死体を見たショックで失神し、入院していたユーリアが、真田刑事に伝言を頼むメモを残して警察病院を脱走。

大騒ぎになったが、ユーリアはすぐに発見された。

だが、病室の枕元に残されたメモの存在は消えない。

ユーリア本人は、真田刑事とは面識が無いと証言した。

ただ、ユーリアの知り合い、カインという少年が、真田刑事のことを普段からよく話していたと言う。

だから真田刑事に連絡を取ろうとしたのだと、ユーリアは言った。

……しかし、そんな証言をうのみに出来るはずがない。

真田刑事とユーリアは知り合いなのではないか、と、中森警部は考えたのだ。

だが、深夜に呼び出されたり、面識が無い少女について、何度も質問されたり……

そんな状態は、異例の若さで本庁に勤め始めた真田刑事にとって、よろしい事ではない。

だが、そんな事が分かっていながら真田刑事を大変な目に遭わせたのは、中森警部本人なのだ。

「……ただ今回の事件で、事情聴取を受ける人の気持ちも、少しだけ理解できましたよ。

事情が事情とはいえ、まさか、

……僕の経歴を再び調査されるとは思っていませんでした」

真田刑事の言葉に、今度は中森警部があいまいな笑みを浮かべた。怪盗見習いユーリアの事件の後、中森警部は、真田刑事の経歴を調査したことがある。

一応、真田刑事本人の了解を得た経歴調査だった。

だが、調査で分かったのは、真田刑事の経歴があまりにも異例だということ。

真田 亮史（22歳・7月15日生まれ）

フランス人の父と日本人母を持つ、いわゆるハーフ。

旧姓は梅川だが、中学1年の夏に真田家の養子になり、その際に名字が変わる。

進学校の高校に入学するが、真田家の都合で大学への進学を断念。

高卒で警察の採用試験に合格、だが警察学校入学直後に養父母が強盗に襲われて死亡。

その後、配属先の交番勤務で優秀と判断され、異例の若さで警視庁に配属される……

「『……君の経歴は、いろんな意味で異例だね』って……  
上司に真剣な顔で言われたことがあるんです」

亮史のボソツとした呟きで、中森警部は我に帰った。

確かにこんな経歴の部下がいたのなら、そう言っしかないだろう  
と、中森警部は思う。

気まずい沈黙の末、真田刑事は言った。

「怪盗見習いになろうとしたユーリアさんも、過去にいろいろあっ  
たんでしょうか？」

中森警部は返事を返すことが出来なかった。

確かに、中森警部はユーリアの過去を知りたかった。

そして、今でもそれを知りたいと思っている。

だが当のユーリア本人が過去の境遇について一切語らなかったの  
で、結局は闇の中だ。

事情聴取中、ユーリアは、自分の過去に対する質問に、ハッキリ  
と『言いたくない』と答えた。

そんな者に、同じ質問をしつこく続けても効果は無い。

戸籍の無い者がこの国で合法的に暮らせるはずが無く、ユーリア  
が、過去に何らかの事情を抱えていたのは間違いない。

だが、その事情の詳細は不明のまま、役に立たない手がかりだけ  
が残されたのだ。

何らかの犯罪組織が関わっている可能性は濃厚だった。  
もしかすると怪盗キッドも、そういった組織に関わっていたのかもしれない。

「……捜査二課だけでなく捜査一課も、ユーリアの過去を知りたがっていた。

だから捜査一課の刑事も、ユーリアの事情聴取の一部に参加したが……」

……だがユーリアの過去は分からなかった。

ユーリア本人もよほどの事情があったのだろう。

捜査一課の女性刑事も事情聴取に加わったが、結局、ユーリアは自分の過去を話さなかったのだ。

「……」

小さな嘆息と会釈により、2人の会話は終わった。

真田刑事は、エレベーターに向かう中森警部の背中を一瞬見つめ、だがすぐに目を伏せる。

ゆっくりと歩き出しながら、真田刑事は心中ひそかに思う。

自分は、自分の戸籍を偽っているのだ、と。

真田刑事は厳密に言う人ではなく、人間以外の血を継いだハーフだ。



真田亮史という名も正確には偽名で、本名はシオン・チャーコリオールという名だ。

そして、人間ではない者の隠れ里で、彼は育った。

彼が一人前だと認められ、オモテ社会の養父母の所で暮らし始めたのは、13歳の夏の頃。

その時、戸籍は偽造され、二セの経歴の上で、彼は今でも人間として暮らしている。

高木刑事も、目暮警部も、おそらく怪盗見習いの少女もこの事実を知っている。

しかし中森警部はこの事実を知らない。

否、正確には、中森警部を含め、大多数の者がその事を知らないのだ。

高卒で警察の採用試験に合格した時、目立たない普通の警察官になろうと決めた。

目立たぬことが、経歴詐称がバレない一番の予防策だと思っていた。

だが警察学校入学と同時期、自分の養父母が強盗殺人の被害者となった。

実の弟も、自分と同様、養父母を犯罪で失った。

……なんと目立っていることだろう。

真田刑事は一人、静かに嘆息した。

昨年の夏、真田刑事の故郷の隠れ里で暮らしていた少年が、突然隠れ里から家出した。

隠れ里は大騒ぎになったが、だが少年が戻ってきた後も、もつとすごい騒ぎになった。

少年が戻ってきた時、すでにその少年は、オモテ社会の犯罪組織の一員になっていたのだ。

皆、少年に犯罪組織から抜けることを勧めたが、少年がそれに耳を貸すことは無かった。

少年の父親は絶縁を宣言しそうになり、母親はそれをかばった。それ以後、少年は時々帰郷する以外は、犯罪組織で暮らしている。

真田刑事はこの騒動の後、少年課への配属を希望した。

遠回しではあるが、少年への抗議のつもりだった。

その少年の名は、カイン・ダークロード。

犯罪組織では、本名のままカインと呼ばれているらしい。

真田刑事は、再び嘆息し、エレベーターでなく階段へと向かった。

今から一ヶ月以上前、カインと同じ犯罪組織から脱走した少女が、怪盗キッドの見習いになったことも。

その少女がカインの雑談により真田刑事を知っていたことも不本意だったが、だが、

もはやそれは、苦情を言ってもどうしようのない、揺るがない事

実  
な  
の  
だ  
っ  
た  
。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第3節〉（後書き）

〈作者より〉

第2章第3節、やたらオリキャラの説明が多いです。

いつそのこと真田刑事の説明を別の節に転記しようかとも思ったんですが、それはそれで問題が……（汗）

ともあれ次の節は、不本意な脱獄犯扱いの女が出てくる予定。  
他の物語の改版掲載後に投稿するので、次回更新は少し遅れます。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第4節〉

5月20日 午後6時30分 都内某所

黒の組織が壊滅する前、まだベルモットが幹部だった頃。

彼女にとって、同じく幹部だったジンは、特別な存在だった。

……様々な、意味で。

だが黒の組織壊滅後、ベルモットはジンと一度も会っていない。  
ベルモットは壊滅の直後に逮捕されていたし、ジンは壊滅からず  
っと、現在も行方不明のまま。

もしかしたら一生会えないかもしれない、と考えたことはある。  
しかし大して会いたいと思っておらず、それ以前に拘置所から脱  
獄する気も起きず、ベルモットはただ漠然と時を過ごしていた。

……先月までは。

先月2日の深夜、彼女を取り巻く状況は急変した。

黒の組織の幹部だった男に、誘拐同然の方法で拘置所から連れ出  
されたのだ。

連れ出された本人すらよく分からぬ方法で脱走し（意識を半ば失  
っていたらしいので当然だが）、気が付けば拘置所の外にいる。…  
…という、訳の分からぬ脱獄法で。

当然、連れ出した男と口論になった。

この脱獄は、ベルモットにとって不本意だったから。

しかしそんな言い争いや何やらを経て、その男が作り上げた、黒  
の組織の残党が集った犯罪組織にいる。

……それが、現在のベルモットだ。

そして、今。

ベルモットは少しだけ混乱していた。

なぜなら、……彼女は今、ジンのかつての愛車に、乗っているのだから。

「何で貴方、このポルシェを入手したの？

……このポルシェはジンのモノよ」

かつてのジンの愛車、ポルシェ356Aの助手席で、ベルモットはそう質問した。

その間に半分笑いながら答えるのは、彼女の横でハンドルを握る男だ。

「一年くらい前、中古車店で偶然発見したんだ。

パッと見てすぐにジンの愛車だって分かったけど、そのジンはいまだ安否不明。

もしジンが現れたら、この車を売り渡そうと思ったんだよ」

彼女の横の運転席、ハンドルを握りながら語る男の声は、かなり気安い。

だがベルモットは、この男に対し常に警戒感を持っていた。すでに分かりきっている。この男に気を許してはならないのだと。

この男は、……ベルモットを拘置所から誘拐同然に連れ出した、張本人なのだ。

気を抜かぬまま座席に浅くもたれ、ベルモットは薄目を閉じた。  
そのまま横目で見る運転席、かつてのジンのように、白髪の男が  
車を操っている。

男の年齢は中年以上だと、ほおの大きなシワが示している。  
だが目元はミラーシェードで覆われていて、隣席に座っても、こ  
の男の特徴をそれ以上掴めない。

「僕を横目で見るのは止めてくれ、ベルモット。  
黒の組織が存在していた時とは逆だ。今の僕と、君の地位は。  
僕は君を支配してるんだよ、完全ではないけれど」

「……分かったわよ」

そう言われると従うしかない。ベルモットは姿勢を正し、前方を  
見た。

たしかに逆だ、と彼女は思う。

この男が行ってきたことは間違いなく犯罪だが、言っていること  
は全て真実だ。

……とても悔しいことに、ベルモットはこの男の素顔と本名を知  
らない。

だが、この男が、昔、黒の組織に入った時の経緯は知っていた。

今から数十年前、黒の組織の規模がそれほど大きくなかった頃。  
今は亡き組織のボスが、壊滅後の敵対組織のアジトで、一人の記憶喪失の少年を拾ったという。

その少年の身元は判明せず、しかし暗殺者としての才能を、拾った本人に見出された。

いつしか身元・本名不明の少年は、ネームレス Nameless（名無し）と呼ばれるようになった。

記憶の戻らぬまま、……あるいは戻った後、密かに封じたかも知れないが、年月が過ぎるにつれて、ネームレスは、次第に暗殺者としての頭角を現すようになった。

そして、ネームレスが拾われて10年後。

誰もが、ネームレスの優秀さを認めていた頃。  
組織のボスが、ネームレスを突然呼び出した。

皆は思った。

きつとボスは、名の無いこの若者に対し、組織幹部の証であるコードネームを授けるのだらう、と。

その予想は半分当たって、半分外れていた。

ボスはネームレスの優秀さを認めた上で、こう言ったという。

「本名不明の者に、コードネームをやる意味は無い。

コードネームを授かるのは、本来、オモテ社会で生きてきた者が、本名を捨てた証。

名無しのおまえに、コードネームはいらないだらう？」と。

……ゆえにネームレスはネームレスのまま、コードネームの無い唯一の幹部となった。



さすがにコードネームを持つ者達に配慮し、身分的にはベルモット達の一段下、という扱いだったが、待遇自体に、ほとんど違いは無かった。

「ネームレス、そういえば貴方、どこに行くの？」

ベルモットの、長い沈黙を破る問いに、かつてジンのモノだった車を運転しながら、ネームレスは言った。

「ヤクザの家。知り合いがいる。

ベルモット……君も、僕と一緒に来て欲しい」

夕闇の中、ポルシェは道を走り行く。

## 第2章 5月 〽 壮絶なる独白 第4節 〽 (後書き)

〽 作者より 〽

お待たせしました。汀です。

約3週間ぶりの更新で、ベルモットの節が投稿出来ました。  
その上、やっと敵役登場です。

これでこの物語の主なオリキャラは完全に出し切りました。

ネームレスのつづりはNameless。

『名無し』という意味以外にも、『無名の』などの意味もあるようです。

## 第2章 5月 〱 壮絶なる独白 第5節〱

5月20日 午後6時35分 ビリヤード場・ブルーパロット

店内

「桜……じゃなかった、優樹ちゃんは、寺井ちゃんに気付いたんだな？」

珍しく客の少ない（……というか客が二人だけなのだが）店内を眺めつつ、快斗は、携帯電話で寺井にそう質問した。

『ええ。

間違いなく気づいておりました、ぼっちゃま』

「まあ、そうだろうな……」

あいづちを打ちつつ、快斗は、これまで低くしていた声を更に下げる。

快斗は今、寺井の姿に変装しているものの、声色を変えているわけではない。

店内にいるのは、はしゃぎながら離れた台でプレイしている若いカップル一組と、快斗だけ。

この状況下、快斗の声を聞かれることはないだろうが……、話の内容が内容だけに、大声で通話するわけにはいかなかった。

『どうでしょうか？ ぼっちゃま』

「とりあえず、寺井ちゃんの正体に気付いているなら面倒が省ける

だろ。

…… 22日、変装した俺が会いに行く」

『ぼっちゃまが会いに行かれるのですか？』

「そうするつもりだ。

寺井ちゃん、…… 優樹ちゃんが通う学校はどこだっけ？」

『賢橋小学校です。

6年2組になるそうです』

「分かった。

『22日の放課後、変装した怪盗キッドが会いに行く』と……  
伝えてくれ」

その時、突然ブルーパロットのドアが開いた。

これまで少なかった客の人数を穴埋めするかのように、何人もの常連客が一気に入ってくる。

『…… 分かりました。ぼっちゃま』

寺井も携帯電話越しに、客が入ってくる雰囲気を感じたようだ。

「ああ、頼む」

言った直後、快斗は通話を終え、さらに携帯電話の電源を切った。

店内、客は次々と入ってきている。

これ以上の通話は、やめておくほうが賢明だ。

同刻 都内某所

「ヤクザの家？」

……貴方、その知り合いの所に行って何をするつもり？」

ポルシェ356Aの車内、助手席のベルモットの怪訝けげんそうな問いに、ネームレスは笑わず答えた。

「殺人の依頼」

「……殺す対象は誰？」

「小学校の教師をしながら、ウラの世界に関わっていたヤツ。先日、僕達に関わったとある取引を、そいつが妨害したんだ。基本的に僕達は民間人を殺さないが、……こういうのは例外だ」

「何でわざわざ他人に依頼するのかしら？  
貴方達が直接手を下せばいいでしょうに？」

「そういうわけにいかないんだよ」

ネームレスはニヤリと笑い、更に言った。

「色々事情があるんだよ、ベルモット」

## 第2章 5月 〽壮絶なる独白 第5節〽（後書き）

〽作者より〽

なんか投稿ミスしたようで、とりあえず2度目の後書き投稿です。

5日ぶりの作品投稿。

第5節にして、やっと色々動き出しました。

ストーリーはすでに決定しているのですが、何節で終わるかメドが立っていない状況で……（汗）

次回も色々動きます。ベルモットも引き続き登場予定です。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第6節〉

5月20日 午後6時37分 賢橋町 坂村園

「寺井さん、電話してたんですか？」

携帯電話片手に男子トイレから出て来た寺井を見、優樹はそう訊ねた。

「ええ……」

寺井は言いながら、何気なく周囲を見る。

2人のいるトイレ前の廊下は、はしゃぐ子供しかいない。

大人が他にいないことを確認し、優樹だけに聞こえる声量で寺井は告げた。

126

「あさつての放課後、あなたの師匠に会いたいですか？  
師匠は会つのを望んでいるようですが」

……この言葉だけで、優樹には通じるはず。

一ヶ月前、彼女は、怪盗キッドの見習いになろうとしたのだから  
それに優樹は、寺井が怪盗キッドの仲間だということに気付いて  
いる。

寺井が言った『師匠』は、イコール、怪盗キッドしかありえない。

寺井の思った通り、優樹はかすかに息を飲み、そして言う。

「……もちろんです。  
会いたいです。」

あさつての放課後、ですね？」

「そうです。

では、22日、……あなたに、変装した師匠の接触があるでしょう」

「ありがとうございます」

寺井は、その言葉に笑みを返すと、その時だ。

「優樹ちゃん、園長が呼んでるよ……」

坂村園の女性ボランティアが、優樹の名を呼んだ。

「早く行ったほうが良いですよ？  
誰かが、あなたの名前を呼んでいる」

「はい……」

優樹は顔に笑みを浮かべ、名を呼ぶボランティアのほうへ駆け出した。

同日 午後6時45分 都内某所

「待ち合わせしてるヤツがいる。  
そいつ、ヤクザの家に行く前に、この車の後部席に乗るよ」



ポルシェ356Aを運転しながら、ネームレスはそう切り出した。ベルモットはその言葉に、少しだけ眉をひそめてたずねる。

「……誰が、どこで乗るの？  
まさか、路上駐車はしないわよね？」

正直に言つて、道を歩く者に自分の顔を見られることは、好ましい事ではなかった。

先月、拘置所からベルモットが消えた時、かなり報道され、多くの人間に顔写真を覚えられている。

つまり、民間人が車中のベルモットを見た瞬間、即、警察に通報するという事もありえるのだ。

無論、昼間ではない今の時間帯、走行車両がベルモットの姿を発見する事は無いだろう。

だが、路上駐車となれば話は別だ。

ネームレスも質問の意図を感じ取ったのだろう。彼は静かに笑った。

「待ち合わせている場所は地下駐車場。  
乗るのは、むつたかあやの六鷹綾乃」

「むつたか……？」

突然会話に出てきた、聞き覚えのある女性の名に、ベルモットは記憶の糸をたどった。

「覚えているかい？」

……六鷹綾乃が、どういうヤツなのかを」

一応、覚えている。

黒の組織の実働部隊にいた、少女だ。

「浦上千恵と同じ部署、『チーム・ベアー』にいて……  
右目に黒い眼帯を付けていた、コードネームが無かった子、……  
だったかしら？」

そう、六鷹綾乃は組織の末端の人間だった。

だがウォッカの娘が同じ部署だったため、ベルモットは彼女の顔を覚えている。

……うる覚えだが。

「その通りだよ、ベルモット。

現在、六鷹綾乃は、僕の作り上げた組織で働いてる」

「……そう」

綾乃がこの車に乗ると聞いた時点で、きっとこの組織で働いているのだろう、と予測していた。

ネームレスは『教師の殺人依頼のためヤクザの家に行く』と言った。

だがベルモットをわざわざ同行させている以上、きっとネームレスにとって、重大な事なのだと思う。

これから起こるであろう教師の殺人事件に、綾乃がどう関わるかは分からない。

ただ、ベルモットは、おそらくネームレスの配下になっている綾乃に、少しだけ同情を感じた。

おそらく彼女は、ベルモット同様、少なからずネームレスに翻弄されているのだから。

## 第2章 5月 〽 壮絶なる独白 第6節 〽 (後書き)

〽 作者より 〽

他の物語でも出て来たオリキャラ、『六鷹綾乃』、名前だけ登場です。

次回は姿が出ます。

次回更新は、6月3日 〽 5日の間になると思います。

## 第2章 5月 〱 壮絶なる独白 第7節

5月20日 午後7時 都内某駐車場

留置所や拘置所の独房では、一人きりで過ごす時間がかなり多くなる。

当然のことだが、色々なことを冷静に考えることが可能だった。

例えば、壊滅前の黒の組織の幹部について。

“幹部達の中で、ボスである『あの方』への忠誠心が一番強いのは誰だったのか？”

……とか。

かつて拘置所の独房の中で、それを考えた時。

ベルモットは忠誠心の強そうな幹部達の顔を何人か思いついたものの……

複雑な感情があったので、彼女はそこで想像を止めた。

今だから断言できるのだが、きつと、『あの方』への忠誠心が一番強かった幹部は、ネームレスだろう。

黒の組織の残党を集め、新たな犯罪組織、『アケカゼ朱風』を作る、という行為。

少なくとも表面上は忠誠心を見せないと、部下の反感を買ってしまい、組織としての存続が危うくなる。

ベルモットも、昔は『あの方』に対し、忠誠心を持っていたと思う。

だが彼女は組織の壊滅前、裏切り同然の行為を行い、それは間接的に壊滅の原因となった。

昔持っていた自分の忠誠心は、組織の壊滅前には薄れていたのだと、ベルモットは自覚している。

逮捕後に後悔しても遅いと分かりきっていたので、気を休めるような祈りは、しなかった。

どうせ極刑に処せられてもおかしくない身、裁きが下つても黙って受け入れるだけだと。

黒の組織の残党にうらみ殺されたとしても、死刑判決が下つても、『死』という結果は変わらない。

だが、今は違う。

今のベルモットは、拘置所から連れ出されて……

死を恐れるがゆえに、ネームレスが作った『朱風』に、身を寄せている。

黒の組織を裏切った時も、警察に逮捕された時も、死を覚悟したのではなかったのだろうか？

かつての『あの方』に対する忠誠心と同じく、覚悟は薄れてしまったのだろうか？

……とにかく、ベルモットは自分が弱くなったのを自覚していた。

「君が六鷹綾乃を見たら、驚くと思う。

……アイツ、黒の組織の壊滅後、結構変わったんだ」

ネームレスのそんな声に、ベルモットの思考は中断された。

フト周囲を見、このポルシェ356Aが駐車場の一角で停車している事に、やっと気付く。

「……そう」

ベルモットはそれだけの返事を返し、考える。

黒の組織壊滅後、ベルモットは弱くなった。

一年以上独房の中にいたのだから、当然の結果だ。

では、ネームレスが作り上げた『朱風』で、綾乃はどう変わったのだろう？

「六鷹綾乃の……一体どんなところが変わったの？」

「後で見れば分かると思う、けど。」

……まあ、いいや。

背が伸びて、長い髪を切って、それに何より……雰囲気が変わった」

「雰囲気が？」

「そう。」

『朱風』が出来た頃の頃、結構大きな事故に遭ったんだ。

それで、浦上千恵が死んだりして……

それから、アイツの雰囲気が変わった」

ベルモットはその言葉から大体の事情を察する。

そして腕を組み、いずれこの車の後部席に乗り込むであろう六鷹綾乃を待った。

同日 午後7時15分 同駐車場

薄暗い地下駐車場の中を、一人の若い人間が歩いていた。

長身のその人間が身に着けているのは、スラツとした印象の黒いスーツ。

だが服よりも目立つのは、右目を隠している大きな黒い眼帯だ。

本来、その人間の第一印象は、中性的で無表情な顔なのだろう。だが眼帯のおかげで、やたら硬質で冷たい印象だけが先走っていた。

おまけに……見る者が見れば分かるのだが、その人間の歩き方には、全くスキがない。

だが驚くべき事に、その人間の性別は、女だ。胸のふくらみがほとんど無い上、着ている服も男性用だが、その人間は女性だ。

しかも、大人顔負けのオーラを発しているものの、彼女は未成年だった。

この女性の名は、六鷹綾乃。10月18日生まれ、17歳。

今さら言う事でもないのだが、16歳の頃に黒の組織の壊滅を経験した……

『黒の組織で育った子供』だ。

……唐突に、六鷹の歩みが速くなった。

彼女が揺らがない無表情で見据える先、目指す車が停まっている。かつての黒の組織の幹部と、同じく幹部で、かつ今の六鷹の上司が乗り込んでいる車。



六鷹は車にたどり着くと、後部席へと静かに乗り込んだ。  
そして気づく。

助手席のベルモットが軽く目を見開き、運転席のネームレスが薄ら笑みを浮かべていることに。

六鷹綾乃が自分の表情を不思議がっていることに、ベルモットは数秒経ってやっと気づいた。

先ほど、ネームレスが告げた六鷹の変化から、ある程度の予想はしていたが……

だが実際の変化は、その予想以上だった。

「確認だ。

これからの行き先と、目的を言ってみろ」

薄く笑っているネームレスの命令に、六鷹は無表情に答える。

「行き先は、賢橋町の、先日取引を行ったヤクザの家。  
目的は、取引妨害者の殺人依頼」

それを聞いたベルモットは、思わず声を上げた。

六鷹の声の低さと冷徹さには驚いたが、それ以前に……

「賢橋町？

私は初耳よ、ヤクザの家の場所なんて……」

「ベルモット。隠す気は無いよ、ヤクザの家がどこにあるかなんて。ただ、言わなかったただけだ。」

どうせ君にご同行願ってるんだ、事前に言わなくても……後で分かるだろ？」

真顔に戻ったネームレスのその言葉に、ベルモットは反論できない。

……と、彼はハンドルを握り直し、軽く咳払いをした。  
ポルシェが始動する音と共に、彼は更に言う。

「今から、そのヤクザの家に向かう」

言った直後、3人を乗せたポルシェ356Aは、駐車場の出口へ向けて動き出す。

## 第2章 5月 〱 壮絶なる独白 第7節 〱 (後書き)

〱 作者より 〱

前回の予告よりも遅れた投稿になり、本当に申し訳ありません。  
家のPCに入れていた原稿データが全部消えてしまうトラブルがあり、一から書き直していたら大幅に遅れてしまいました。

結果、内容自体は同じなのに文章量が増えるという謎の状況に……  
… (汗)

次回の内容は、3人のヤクザの家訪問やらなにやらです。

追記：ベルモットが連れ去られた場所を、留置所から拘置所に変更しました。

当初、私に司法の知識が無かったためです。

現在、そういった過去のミスを順次訂正しております。

## 第2章 5月 〱 壮絶なる独白 第8節 〱

5月20日 午後7時30分 都内某所

人間が3人も乗り込んでいるというのに、誰も口を開くことはない。

車内は沈黙してしまい、結果的に話しづらい雰囲気になる。

ポルシェの運転席でハンドルを握るネームレスは、当然、前方を見ている。

助手席のベルモットは、六鷹から借りた帽子を目深に被り、顔を軽く伏せている。

後部席の六鷹綾乃は、眼帯を外し、両目を閉じている。

……おそらく眠っているのだらうと、ベルモットは気配で判断した。

だが沈黙を壊したのは、目を閉じたままの六鷹だった。

「ベルモット」

六鷹はそう呼んだ。

「……何かしら？」

「これから行くヤクザの家の住所、賢橋町の、1丁目」

「……そう。」

それがどうかしたの？」

「……」

「まさか、ヤクザの家の番地を伝えるために、話しかけたわけじゃないでしょう？」

六鷹は両目を閉じたまま口を開く。

かすかに姿勢を正し、右目に眼帯をつけながら、

「もちろん、……違う。

ただ、知らせておきたいことがあった。だから」

「『知らせておきたいこと』？」

「……それは何？」

眼帯を着け終えた六鷹は目を開けた。

車のミラー越しにベルモットを見据え、

「この殺人依頼を終えて、……帰りの車の中で話す。

もう目的地に到着した。

今話し始めても、時間がない」

「……」

ベルモットは顔を上げて周囲を見る。

いつのまにかこの車は、大きな和風の屋敷の車庫に停車していた。

同日 午後7時35分 賢橋町1丁目

車を停めた直後、屋敷の中から数人の男たちが出てきた。皆、ひと目見てすぐにチンピラだと分かる格好をしている。彼らはヒソヒソと何かを話しながらこのポルシェの方にやって来て……

否、ポルシェの所にやってくる前に、ネームレスが車のウィンドウを開けた。

そして叫ぶように言う。

「あのさあー、君たち。

君たちの親分に、『客が来たぞ』……って伝えてくれる？  
僕の特徴を親分に伝えれば、大体それで分かるから」

……へっ？

まるでそう言わんばかりの顔でチンピラ達は立ち止まり、ベルモットは思わず眩暈めまいを感じる。

一瞬の後にチンピラ達は我に帰り、慌てて動きだした。

ネームレスはミラーシールドを使用していて、しかも黒いスーツ姿。

さらにこんなセリフを言った以上……  
きっと、どこかの大きな暴力団の幹部と勘違いされている。

と、ベルモットが思った、その時。  
屋敷の中から、体格の大きい男が飛び出してきた。

街灯に照らされるその男は、ネームレスと同じく黒いスーツ姿。  
だけど目元にサングラスを掛けていて……

ベルモットは息を呑んだ。  
そして思わず男の名を呟く。

「ウォツカ……」

信じられなかった。

なぜ、曲がりなりにも黒の組織の幹部だった男が、こんな所にいるのだろうか？

「ベルモット。」

……驚いているのか？」

六鷹の質問に、ベルモットはうなずく。

ネームレスはクックツと笑いながら、車のドアを開いた。

ベルモットにも車を降りるよう視線で示し、彼女は慌ててドアを開け、六鷹も無言で動く。

……こうして。

かつてのジンの車に乗っていた3人は、ヤクザの屋敷の敷地内に、ほぼ同時に降り立った。

つつ立っているウォツカの側を通り、彼らは静かに屋敷内へと向かう。

ウォツカが自分の顔を見つめているのを、ベルモットは確認する。  
大きな衝撃を受け何も考えられなくなっている……と、はっきりと分かるそんな表情を、彼はしていた。

同日 午後7時40分 賢橋町1丁目

「2人ともここで待機しててくれ」

ヤクザの屋敷の一室、ネームレスは六鷹とベルモットにそう言い残し、屋敷の中に消えた。

結果として2人は、6畳ほどの狭めの和室に取り残されるハメになる。

その時始めて知ったのだが、ネームレスは元々、一人でヤクザに對し殺人依頼をするつもりだったようだ。

六鷹は、ネームレスの身に何か起きたときの護衛として、駆り出されたという。

ではなぜ、ベルモットは同行させられたのだろうか？

それはおそらく……ネームレスに、何か魂胆があるからだ。

ため息を隠しつつ、ベルモットは帽子を押さえ直した。

一応、自分も六鷹も黒スーツを着用してはいるが……

金髪外国人の自分と、黒い眼帯を着用した上、長身の六鷹は、常識的にかなり目立つ容姿。

だが自分達に視線が集まる理由は、それだけではない。

周囲のチンピラどもの視線を感じながら、ベルモットは感覚を研とぎ澄ます。

約1年間の独房生活で弱くなりはしたものの、こういう感覚は無いよりマシだ。

……その時、ベルモットの耳は廊下を進む足音を捉えた。



荒れた感情をそのまま表す音、そして、

勢いよく開くふすまを、ベルモットはじつと見つめた。

彼女の目の前、荒い息を発しながらウォッカが立っていた。

## 第2章 5月 〱 壮絶なる独白 第8節 〱 (後書き)

〱 作者より 〱

自宅のPCの本格的な故障により、大幅に投稿が遅れました、訂です。

本当に申し訳ありません。

やっとストーリーが展開し始めたのですが、学校のテストのため今月中の投稿(他の作品も含む)は無理と思います。

6月21日追記

時間を見つけて本文を読んだところ、明らかに読みにくいところを発見、修正しました。

文章の句読点を数カ所入れ替えたただけなので、内容そのものに変更はありません。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第9節〉

5月20日 午後7時37分 賢橋町1丁目

戸惑うチンピラ達を含み、この部屋にいる者全ての視線がウオツカに集中した。

が、注目を受けながらも、興奮のあまりウオツカは何も話せない。

一方、正座している六鷹綾乃は、チンピラ達とは違い、静かにウオツカを観察していた。

……ウオツカが冷静になるのは時間がかかる、か。

かつて黒の組織の幹部だった者の態度に、六鷹は呆れつつもそう判断する。

ゆえに周囲の雰囲気を見無視し、六鷹は立ち上がった。

動作にスキはなく、表情は無表情。

だが181cmの身長と黒い眼帯は、確実にこの場の雰囲気を威圧し、凍らせ、そして。

チンピラ達を見渡しながら、六鷹は静かに言った。

「すまないが、あなたがたは退席していただけないだろうか？

我々、3名で……それこそ複雑な話をするだろう。だから」

「……！」

3名、という単語を強調した言葉に、彼らは一瞬浮き足立つ。

戸惑いと怒気が六鷹に向かうが、しかし彼女はベルモットとウォツカに向き直った。

うかがうような六鷹の視線。

ベルモットはうなずき、我に帰ったウォツカもブンブンと首を縦に振っている。

だから六鷹は再度チンピラどもを見渡した。

「そういうことだ。」

「……退席してほしい」

最早、反対できず、六鷹の言葉に彼らは素直に従うしかない。

ゾロゾロとチンピラ達が出ていく横、立ち尽くしたウォツカは落ち着きを取り戻しつつあった。

彼は一度ため息をつき、目の前で正座するベルモットと六鷹に、改めて向かい合う。

が、部屋の中に入るウォツカを見、座りかけていた六鷹が切り出した。

「ウォツカ、必要ならば座布団を」

「……」

見ると、ベルモットも六鷹も座布団の上に正座しているが、ウォツカは座布団を持っていない。

そもそも興奮しながらこの和室に来たウォッカが、座布団を持っているはずがない。

自分が座っていた座布団を、六鷹はウォッカに差し出した。座布団片手に、彼女は言う。

「黒の組織はもう、存在していない。

だがあなたがたはコードネームを持った幹部で、私は末端だった」

そして帽子を取ろうとしているベルモットのほうをチラリと見、さらに、

「当時の組織を裏切った者の噂を私は知っているが、今の私にその真偽を確かめる方法はない。

組織壊滅から１年以上が過ぎ、当時の構成員の居場所もずいぶん変わってしまった。

たとえベルモットが組織を裏切っていたとしても、今ここで検証はできない。

だが、当時のことを話すなら、少しは……

私は、少しは、当時の組織内の身分を尊重すべきだろう」

「……」

ウォッカは六鷹を見つめた。

彼女の言うことはもっともだ。

組織壊滅の原因がはっきり分らない現在の状況下、ウォッカが反論する理由はない。

だが、黒の組織があった頃とは違う六鷹の口調の変化に、彼はかなりうろたえていたのだ。

戸惑いつつも、ウオツカは六鷹からの座布団を受け取る。

こうして。

座布団の上に正座するウオツカ、それに向かい合うベルモットと、座布団なしで座る六鷹という構図が出来上がる。

ウオツカの興奮は、すでに引いていた。

六鷹は当然、落ち着いていた。

帽子を取ったベルモットは、ウオツカの言葉を待っていた。

「……」

先ほどとはまるで違う、冷えた沈黙。

気を取り直すように、ベルモットは小さく咳払い。

無表情を意識しながら、彼女は言った。

「ウオツカ、あなたは、何か言いたいことがあるんじゃないの？

それこそ、……色々なことを」

「当たり前だ。

テメエは、先月脱獄したってニュースで言っ……」

ベルモットは深く納得した。

ウオツカの言う先月の脱獄は、自発的なものではない。

正確には脱獄ではなく、ネームレスによる拘置所からの連れ去りだ。

しかしウォツカはそのことを知らない。

きつと、報道でしか情報を入手出来なかったのだろう。

が、反論しようとした直前、六鷹が口を挟む。

「ニュースの情報は、必ずしも正しいとは言えないだろう。

少なくとも、ベルモットの脱獄事件の報道は不正確だった」

「……へ？」

間の抜けたウォツカの声。

ベルモットは思わず苦笑いを浮かべる。

「貴方の言う脱獄事件について、その真実を今この場で言う気はないわよ。

きつと、私の言ったことを、貴方は信じないだろうから」

きつとそうだ。信じるはずがない。

拘置所に忍び込み、独房で暮らす者を連れ去るという行為。ウォツカにとっても自分にとっても、神業に近いのだから。

ベルモットはそう考え、だから彼女はさらに言う。

「ウォツカ、貴方はどうしてここにいるの？

ここはヤクザの家でしょう？

ここにいる理由を教えて？」

ウォツカはうなずいた。

「娘の千恵が死んだ後、しばらく放浪して、

……それからネームレスの紹介で、この組で暮らしてるだけだ」

ベルモットは眉をひそめた。

ウォツカの娘である浦上千恵の死は既に知っており、今さら驚くものでもない。

ちなみに彼が敬語を使わないのも、ささいなことだと思い、あえて無視。

だが彼女が反応したのは、ウォツカの話の後半部分。

「『ネームレスの紹介』？

それ、本当なの？」

ウォツカは再びうなずいた。

「……」

ベルモットが何か言おうと口を開いたまさにその時、六鷹の耳はある音を捉えた。

それは、この和室へと向かう、屋敷の廊下を進む足音。先ほどのウォツカと違い、かなり気配がつかみづらい。

だが六鷹は誰の足音なのかを感知した。

だからウォツカに何か忠告しようとしているベルモットに向かい、告げる。

「ベルモット。

ネームレスのほうの仕事、……殺人依頼が終了したようだ。



貴女は感じられないかも知れないが、ネームレスがこの和室に向かっている」

「……エッ？」

驚いてる様子のベルモットに向かい、六鷹は無表情のまま。

「私達が対話できる時間は、もう終了したらしい」

直後、この部屋のふすまが静かに開いた。

ふすまを開けた人間は、誰もが予想した通り、ネームレス本人。彼は六鷹とベルモットに、仕事を終えたため帰ることを告げた。

2分後。

ベルモットはウォッカに何も言えなかった後悔と共に、このヤクザの家を立ち去った。

## 第2章 5月 〱 壮絶なる独白 第9節 〱 (後書き)

〱 作者より 〱

お久しぶりです、汀です。

テスト明けだったのですが、大幅に投稿が遅れてしまいました。

文を書く感覚を忘れてウダウダ書いていたら、こんな風になってしまつて……

書きにくいキャラ3人もそろえた会話シーンなんて、書くもんじゃないなとつくづく思いました。

(ちなみに一番書きやすいのは、新一と、なぜか高木刑事です)

次の投稿はこの物語でなく、『黒髪少女の終末記』になる予定。どんなに遅くても9日までに投稿したいです。

投稿後追記

チェック忘れていたあとかきの誤植、訂正しました。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第10節〉

5月20日 午後7時50分 都内某所

『アケカゼ朱風』のアジトに帰還する、ポルシェ356Aの助手席。  
ベルモットはとてつもなくイライラしていた。

……というのも、

「ネームレス、なぜ貴方は、ウオツカがあのヤクザの屋敷にいることを黙っていたの？」

ウオツカに、あのヤクザのところで働くよう紹介したのは貴方でしょう？」

あの屋敷にウオツカがいることを知っていて、わざと私に対面させて……

どという魂胆なの？ 貴方は？」

「……」

「聞いているの？ ネームレス！」

もはや現在の主従関係も忘れ、運転席のネームレスへ向け、ベルモットは怒鳴る、が。

「ベルモット」

そこに投じられたのは、ネームレスではない、後部座席の人間の声。

静観していた六鷹綾乃が、無表情に発した声だ。

「……なに？ 何の用？」

トゲトゲしい気を発散しまくっているベルモットに、六鷹は言った。

「ネームレスがなぜ黙っているのか、私は、はっきりとは分からない。

ただ、ベルモット。

貴女に知らせたいことがある」

「……貴女、ネームレスをフォローするつもりなの？」

「違う。

あのヤクザの屋敷に行く前、言い損なった話だ」

そのセリフに、ベルモットは思った。

そういえば、六鷹はヤクザの家に行く前、何かを私に知らせようとしたのよね、と。

（作者注：第2章第8節の最初のシーンを参照して下さい）

「ベルモット。

ネームレスから先ほどの一件の真意を聞こうとする前に、私の話を聞く気はないか？

元々、ヤクザの屋敷の訪問が終わった時に話すつもりだったのだから」

六鷹のその言葉に、ククク……とネームレスが笑うが、ベルモットはあえて無視して振り返る。

後部席に座っている彼女の顔は、女とは思えないほど硬質で……揺らいでいない。

「……分かったわ。  
聞くわよ、貴女の話を」

ベルモットはため息まじりにそう告げる。

六鷹は薄目を閉じ、話し始めた。  
彼女がかつてベルモットに知らせようとして、だが時間が足りぬ  
という理由で言わなかった話を。

……ベルモット。

貴女は、人を殺すことが出来るか？

……ああ、おそらく貴女なら可能だろう。

今は無理かもしれないが、昔は、笑いながら人を殺すことが出来  
たのだろう？

だが、私には不可能だ。

私が知らせたかったのは、1年前に死んだウォッカの娘の死因と、  
……その他、色々なことについてだ。

貴女も知っているとと思うが、私はかつて、黒の組織で暗殺者とな  
るべく育てられていた。

しかし私は、……人を殺すことが、出来ない。  
なぜなのか分からないが、どうしても、殺せない。

1年前の組織壊滅の直後……、そう、朱風が出来たばかりの時だ。

私は、ウォツカの娘と共に、ネームレスの指令で任務に向かった。任務の内容は、当初は簡単なものだと思っていた。ただの拳銃の取引だと思っていた。実際は違ったが。

取引で、……現金を渡した途端、私達は狙撃された。相手は元々銃を渡す気がなく、金だけ持ち逃げする算段だったんだろう。

私が相手を撃ち殺すのは、簡単だったはずだ。状況的には。だが私はそれが出来ず……

結果として、部下を死なせた。

「貴女の言う『ウォツカの娘』って、浦上千恵のことでしょう？ 千恵ちゃんが、そんな事件で死んだ？

……どうしてこんな時に、わざわざそんなことを話すのかしら」

ベルモットは不思議に思い、そう問うた。

千恵の死についての詳報は、今更知っても意味のないことだ。

しかし一番の疑問は、六鷹が自分の弱点を告げたこと。

何であれ、ウラの世界に住む人間が自分の弱みを見せるはずがない。

油断は即、死に繋がるということを、六鷹が知らぬはずがない。

「知っていてほしかったからだ。」

私は、おそらく貴女の思うほど、強くはない」

「……」

「私の実力がどんなものなのか、貴女は誤解していると思った。違っただろうか？ ベルモット」

「……確かに、ね」

地下の駐車場で再会した時、六鷹綾乃を暗殺者だと思い込んだのは事実だ。

顔は揺るがず、右目の眼帯は硬質な印象しか与えない。

背も高く、体格も男のようで、それっぽいが……

しかし彼女は人を殺せぬと言う。

「私は、暗殺者になり損なった人間だ。」

そのことを一応、知らせておきたかった」

「……」

ベルモットが黙り込んだその時、ネームレスが突然口を挟む。

「六鷹。」

そんな實力だから、部下から拳銃をひったくられるようなミスをやらかしたんだろ、テメエは」

ワケの分からぬ言葉に、ベルモットは一瞬混乱した。

「……どうということ？」

ネームレスは黙っている。

代わりに説明したのは、後部席の六鷹だ。

「今年の4月、私の部下が朱風から脱走した。

追いかけて……銃口を向けたが、逆にその銃をひたくられた」

「……その部下は、それからどうなったの？」

「逃げられた。

色々あったが、今は一応、一段落している」

「『一応、一段落』？

一体何があったの？

完全には解決してないように聞こえるけど」

「今は監視しつつ微妙に放置状態、……ってことさ、ベルモット。

さつき、僕達がヤクザの家で行なった殺人依頼で、実際に殺人が完了した後で……

本格的に、その問題に取り組む予定だよ」

……ベルモットは思う。

ネームレスは、変なところで大雑把な性格だ、と。



## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第10節〉（後書き）

〈作者より〉

予定より大幅に遅れての更新となりました、汀です。

前回の後書きを見て、とてつもなく恥ずかしくなりました。本当に申し訳ありません。

ちなみにこの文章を書いているのは7月18日の昼です。

きのうの祝日は学校に行かねばならず、代休の暇を見て投稿しているわけですが。

ちなみに今回の話で、第1章でちらりと触れた『桜がひったくった拳銃』の、元の持ち主がやつと出てきています。

六鷹の弱点と一緒に考えていただけるとは、嬉しいです。

次回、（忘れ去られているかもしれませんが）、桜こと坂村優樹、やつと登場します。

追記：本文冒頭に日付と時間が載っていないミス、修正しました。  
7月20日さらに追記：漢字の表記ズレ、修正しました。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第11節〉

5月20日 午後7時52分 賢橋町 坂村園

坂村園の食堂はにぎやかだと、優樹は思う。

小学校に行く前の年齢の子から高校生まで、たくさんの人が、にぎやかにカレーを食べている。

こういった夕飯は児童養護施設の特徴なのかもしれないが、優樹自身にはこういう経験はあまり無い。

キッドに保護される前、朱風にいた頃の食事はこれほど大人数ではなかった上、皆テレビに注目していたし、

それ以前の黒の組織時代では、自分たち末端構成員の食事時間の私語は禁止されていた。

例外は大人が同伴した上でのバーベキューだが、それもしょっちゅうではなく、半年に1回ほど。

「……」

優樹は無言になった。

考え込み、自然とスプーンを持つ手が止まる。

……だが、そのことに気付く者がいた。

優樹の隣席でカレーを食べている、中学生の少女。

「優樹ちゃん、どうしたの？」

「……あ、いえ、何もないです！」

慌てた優樹はカレーの残りを一気にかき込み、隣りのその中学生はフツと笑みを見せた。

だが咀嚼<sup>そしゃく</sup>直後、自分の慌てふためき具合に気づいた優樹は赤面し、微笑みは微妙なごまかし笑いに変わる。

中学生の名前は、泰山<sup>たいやま</sup>香、14歳。

この施設において、優樹と同じ部屋を与えられた少女だ。

気まづくなつた優樹は、完食したあとのカレー皿片手に立ち上がった。

食器を洗うのは大人だが、その前の段階、食器を片付けるのは食事を食べた子供自身。

そういう決まりになっているのだと、優樹は施設の職員から事前にそう聞いていた。

「流し台の場所、分かる？」

「……分かります、大丈夫です」

香の問いに優樹はそう答え、歩き出した。

この食堂はにぎやかだと、流し台に向かいながら優樹は痛感する。これまでの生活では、あまり感じることのなかった子供達の喧騒きつとこれは、平和な生活の証しだ。

自分の環境が変わることに、不安もある。

一応平和だと言えるこの環境下、自分が鈍ってしまうのではない

か、と。

忘れてはならないのは、優樹が犯罪組織を脱走した身だということ。

きつと怪盗キッドは、自分が保護した少女を最大限守るだろう。  
寺井さんがこの施設にいるのが、何よりの証拠。  
関心が無いならば、そんなことはしない。

「……」

明るいほうに考えよう、と優樹は思った。

1ヶ月前、自分を保護した者に会うのは、明後日22日。  
その日が、今から楽しみになってきた。

同刻 都内某所

かつてジンの所有物だった、ポルシェ356Aの車内。  
今の車の所有者であるネームレスの隣席で、ベルモットは言葉に  
詰まっていた。

後部席に座る六鷹綾乃の言葉が、あまりにも意外だったから、だ。

私は暗殺者になり損なった人間だ、というその言葉。

どう答えるべきか分からず、何も言えず、ずいぶん時間が過ぎ、  
しかしようやく告げる言葉を見つけ、ベルモットは言う。

「私も、暗殺者になるのは無理よ。

昔はともかく、今は。

……独房で一年間生活していた人間の身体が、鈍らないと思う?」

「まず間違いなく鈍るだろう、おそらくは」

本格的な訓練など望むべくもないし、そもそも他人と接触する機会がかなり減る。

「……ネームレスが何故、私を拘置所から連れ出したのかは、知らないわ。

何度訊ねても教えてくれないんだものね、一年間も独房でふて腐れていた私に……

果たして何の利用価値があるのかしら?」

独房というのはつまるところ、犯人を沈静化させるための場所に過ぎない。

逮捕時と同じコンディションをベルモットに期待するのには、無理がある。

たぶん、人を殺せないという六鷹よりも、今のベルモットは弱い。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第11節〉（後書き）

〈作者より〉

お久しぶりです。

前回から大きく時間が開いた上での投稿となりました、汀です。

話の設定上、黒髪少女の終末記と同時投稿になりました。

しかもベルモットの会話がえらく長くなり、削れないという状況に。（汗）

次節は9割がた出来上がっているので、明日か明後日の投稿となる予定です。

色々と説明したいことがあるのですが、それまで、どうかお待ちいただければと思います。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第12節〉

5月20日 午後7時54分 都内某所

ポルシェの助手席で、ベルモットは言った。

後部席の六鷹綾乃は、黙って彼女の言葉を聞く。

「貴女の言う通り、私もかつては『あの方』のお気に入りで、笑って人を殺せる殺し屋だった。

……黒の組織が無くなって一年過ぎて、みんな変わっていったのよ、貴女もそうでしょう？

昔の幹部だった者が、……それこそ私のような者が、力を失っていても何の不思議も無い。

……違うかしら？」

「……違うない」

返答しつつ、ベルモットも変わったのだと六鷹は実感する。

ベルモットは、かつてはこんなことを言う人間ではなかった。

「力のない私でも、あのヤクザの屋敷の時のように敬意を持ちたいのなら、止めはしないわ。

でも、それでも私を尊敬するなら、……一つだけ覚えておいて」

「……？」

「どんな状況であれ、自分から積極的に弱点をさらけ出すのはやめなさい。

ウラ社会でそれをやるのは、致命的だから。  
特に親しい人間だとしても、盲信はダメよ、それから」

ベルモットはそれだけ一気に言い切って、六鷹の反応を探った。  
サイドミラーに映る彼女の顔は、ベルモットの次のセリフを待っている。

「『それから』……？」

「あなたが拳銃を失うきっかけになった、女の子の脱走事件。  
私も赤の他人ではないの」

「……！！」

「どういう事だ？」

「拘置所から連れ出されてすぐ、私もその女の子の追跡をネームレスから命じられたのよ。」

「もっとも、すぐにアジトに引き上げてほとんど何もやってないんだけど、ね。」

「……脱走したのは、貴女の知り合いなんでしょう？」

「名前は、確か、かぜしろ……」

思い出すように言ったベルモットに、ネームレスが突っ込んだ。

「かぜしろじゃない、かざしろだよ、ベルモット。  
脱走したガキの名前は、かざしろさくらだ。」

「そのガキが、六鷹の拳銃をひったくったんだ」



……ベルモットは、風代桜、とガキの人名を頭の中で漢字に変換する。

ネームレスは桜のことを『微妙に監視しつつ放置状態』だと言った。

桜がどこにいるのかを、ネームレスは知っているのだろう。知らなければ、そんなことは言えない。

かつての黒の組織では考えられない措置だと、ベルモットは思う。脱走した拳銃をひったくる、という行動。きつと黒の組織だったら、子供でも容赦なく『処分』されていることだろう。

実際、黒の組織が壊滅する1〜2ヶ月前、10代前半の構成員（幹部の子供）の裏切り行為があったのだが、

その者の『処分』にベルモットは駆り出された記憶がある。

その子供が、ベルモットと親しい者の血縁者であったにも関わらず、だ。

「ネームレス」

「何だい？ ベルモット」

先ほどヤクザの屋敷で出会ったウオツカの件や、自分を拘置所から連れ出した理由や、桜の扱いについて。

疑問がベルモットの頭の中で渦巻いていて、だから彼女はそんな疑問をひとまとめにして、言った。

「貴方はどんな組織を作りたいの？」

行き場所を無くした黒の組織の構成員達を集めて、何をするつもり？」

ネームレスは不敵な笑みを浮かべる。

ハンドルを握り、かつてジンの所有物だった車を運転しながら、

「……言えないね。」

そんな答え、今は隠しておくのが一番だ、……と僕は思っているから」

「隠す？ 大事なことなの？」

さらなるベルモットの問いに、ネームレスは言った。

「大事なことから、なおさら隠しておきたいんだよ。」

今は答える時ではないんだよ、そんな質問に。いつか、その質問に答えるときが来るから」

「『いつか』？」

それがいつなのか、見通しがあるの？」

「具体的に言えば来月か、……7月中になるはずだよ。」

『朱風』の全ての構成員に対し、僕はある命令を下す予定だから。その時のその命令文の中、君の質問に対する具体的な答えもあるだろう」

「……」

「ベルモット、……君の質問はもう終わりだ。もう黙ってる。答えるのが面倒だから」

『朱風』は、黒の組織の元構成員たちが集<sup>つど</sup>った犯罪組織。  
そしてネームレスは、『朱風』の全ての構成員の長。  
この事実を、ベルモットは強く意識する。

自分はネームレスの部下。

かつてとは違い、ネームレスは自分よりも上の立場にある。

ネームレスがとてつもなくいい加減なことを言おうと、嘘をつこうと、自分にもはや反論するすべはない。

不本意ながらネームレスに従う以外、自分には生きる方法はないのだろう。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 第12節〉（後書き）

〈作者より〉

2日連続投稿です。

書けども書けども終わらない状況、一体いつになったら終わるやら、……かなり焦りました。

この章には20節以上かかるかもしれないと思っていたのですが、下手したら25節を超えるかもしれません。

ところで、小説の中身の話です。

きのう投稿した『黒髪少女の終末記』にも登場するキャラですが、主人公の桜のフルネームが、この節で明らかになっています。

名字を何にするのか悩んだのですが、結局これで落ち着きました。

彼女の経歴は、

黒の組織『チーム・ベアー』 未成年メンバー 黒の組織壊滅 『

朱風』 『朱風』脱走

で、この小説の冒頭、キッドに拾われるシーンにつながるわけです。

（ちなみに浦上千恵は桜とほぼ同じ経歴で朱風に入るわけですが、直後に死亡している、という設定です）

『チーム・ベアー』に入る前も、彼女はいろんな経験をした事でしょう。

あと、ベルモットの性格について。

見ての通り、彼女もかなり変わっています。

黒の組織壊滅によって色々あったわけですが、独房に入る前の出来事について、これから詳しく書き込むことになると思います。

## 第2章 5月 〈壮絶なる独白 最終節〉

5月20日 午後8時10分 都内某所

ヤクザの家を出て約40分後。

「六鷹だけ、もうすぐ降りるよ」

ネームレスは不意にそれだけを言った。

「……用事でもあるの？」

黙っていると言われたにもかかわらず、ベルモットは問う。

先ほどのことから考えるに、静かに話す分には問題ないと判断したからだ。

「行く所がある」

「ふうん……」

詳しいことは教えてくれないだろうと分かっていたから、ベルモットはこれ以上訊かないし、綾乃も言わない。

だがひとつ、思いついた質問があつて、ベルモットは別のことを訊く。

「貴女は、これから<sup>アケカゼ</sup>朱風にいるの？」

六鷹は、質問に対して質問で返した。

「なぜ、そんなことを突然訊く？」

ベルモットは平然と、

「気になったからよ」

「……」

黙りこんだ六鷹に、ネームレスが言う。

彼は半ば笑い声で、

「……ベルモットに答えてやれよ、六鷹」

彼女は一瞬言葉を搜し、そして言った。

「朱風に、私がずっと居続けるかどうかは分からない。

少なくとも今年度末、3月までは居るだろうが、それから先は分からない」

日本では、3月は学年末。

ということは……

「……貴女は、朱風から学校に通っているの？」

「そう、偽名で専門学校に通っている」

「何か資格を取って、オモテ社会で暮らすつもりなのかしら」

「分からない。

ただ、資格を持っても損ではないと思った、だからだ」

「そうなの」

……なるほど、六鷹はウラ社会でずっと暮らせるとは限らないと思っ  
ているらしい。

会話はそれで終わり、ベルモットも六鷹も沈黙する。

だからそのつぶやきは突然だった。

車が停車スペースに向けて原則を始めた直後、突如として聞こえたつぶやき。

「私には、……人殺しの資格があるんだろうか？  
誰も救えなかったのに」

「えっ？」

聞き返そうとするも、車は止まり、綾乃はすばやく降車する。

車内には一瞬呆然としたベルモットと、半ば笑い顔のネームレス  
が残された。

名のない彼は俯<sup>うつむ</sup>き、吹き出すのをこらえるように言う。

「……六鷹らしいなあ」

「それって、……どういうこと！？」

『誰も救えなかった』って、死んだのは千恵ちゃんだけじゃない  
の？」

「ああ、そうか君は知らないんだね。

……ごめん、ベルモット」

ネームレスの手が動き、次の瞬間ベルモットは腹部に冷たい感触を得た。

久々の感覚だが、彼女はこれを知っている。

これは、

……銃口、だ。

「桜のこと以上の機密情報だから、この件に関して、君には他言もこれ以上の質問も禁じる。

……分かったね？」

鉄の塊を向けるネームレスの顔は、もはや笑っていない。

ネームレスの発言も衝撃的だが、銃口を向けられて硬直してしまっただけに気づいて、ベルモットは打ちのめされた。

……かつてはそうではなかった。

銃口を向けられても平然と喋ることが出来たのに。

元々自分が六鷹より弱いとの自覚はあったものの、その想像よりも自分は鈍っている。

桜のこと、ウォッカのこと、そして六鷹綾乃の、短いがとんでもない独白。



……謎は多くあり、しかし。  
謎の答えをベルモットが知る日が来るのかは、  
未だ誰にも分からない。

## 第2章 5月 〽壮絶なる独白 最終節〽（後書き）

〽作者より〽

本当は教師の殺人事件まで書きたかったのですが、こういった形でいったん休止させて頂きます。

次の投稿は『現時点における固有名詞一覧』です。

## 現時点における固有名詞一覧

現時点での主要な組織や固有名詞などの一覧です。

原則50音順表記です。

原作で登場する組織でも、出る頻度が多い場合は載せてます。

### ・アケカゼ 朱風

…この小説において、重要な役割を持つ犯罪組織。

黒の組織の残党が多く身を寄せ、構成員は部隊ごとに分けて管理される。

創設者は、唯一存在が警察に知らなかった黒の組織の幹部、ネームレス。

現時点で名前まで分かっている構成員は、キャスカ、カイン、ベルモット、六鷹綾乃の計4名。

ちなみに浦上千恵はこの組織に入った直後に死亡、風代桜は約一年後に脱走、六鷹奏はその少し後に転落死。

### ・黒の組織

…かつて存在していた巨大犯罪組織。

新一が高2のとき、2月から3月にかけて滅亡。

現在、幹部はほとんどが捕まるか公開手配されており、警察に存在を把握されていないものはゼロ。

ただしネームレスを中堅幹部に含めれば、彼だけが唯一存在を知られていない幹部と言えないこともない。

ちなみにウオツカは「存在は警察に把握されているが、公開手配はされていない」男であり、これもある意味珍しい状況。

・警視庁

∴ 大雑把に言えば東京都の警察。

小説中では原作キャラ達以外にも、真田亮史が本庁少年課に所属している。

・坂村園

∴ 賢橋町にある児童養護施設。

ここの児童はこの施設から学校に通う。

第2章で風代桜が坂村優樹の名で入所、寺井がボランティアとして潜入。

・ドラキュラ

∴ 人間とは微妙に違う吸血一族。隠れ里で暮らす。

人間に力をさらけ出すことはなく、存在は隠されている（たまに漏れるが）。

現時点で本名、偽名ともに分かっているドラキュラは、

シオン・チャーコリオール（真田亮史）、シエル・チャーコリオール（浜口至）、サラ・リッテルザール（倉科命刻）、の3名。

ただしシオンとシエルは人間との混血。

他には、朱風のカインが混血児。

・ブルーパロット

∴ 寺井の経営するビリヤード場。

第2章で、寺井の代わりに変装した快斗が店番をしていた。たぶんこれから店番の頻度は増えるはず。

・ベアーデ・クロウ部隊

∴ 別名、『チーム・ベアーデ・クロウ』。朱風の部隊のひとつ。

朱風首領のネームレス、記述のないベルモット以外、登場してい

る構成員は今のところ全てここの所属。

ベアーデ・クロウの意味は『クマのツメ』。英単語としておかしいのはご愛嬌。

・ポルシエ356A

∴ジンの愛車だった車。

組織壊滅後、持ち主と共に行方不明になっていた。

何故か中古車として売られていたところをネームレスが発見、買い取って乗っている。

・ネームレス

∴『無名の』、『名無し』などの意味のある英単語。小説中では人の名前。

余談だが彼を書いた直後からくりサーカスの『フェイスレス』を知り、作者はすごく脱力した。

・ヤクザ

∴大雑把に言えばジャパニーズマフィア。舎弟制度で支えられているとかいないとか。

小説中ではネームレスの仲介で、ウォツカがヤクザに身を寄せている。

## 現時点における固有名詞一覧（後書き）

～作者より～

登場人物一覧も製作していたのですが、夕行でタイムアップとなりました。

この一覧に変な箇所などありましたら、感想欄かメッセージのほうにお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4901a/>

---

改版：水色少女の物語～blood & claw～

2010年10月12日05時35分発行